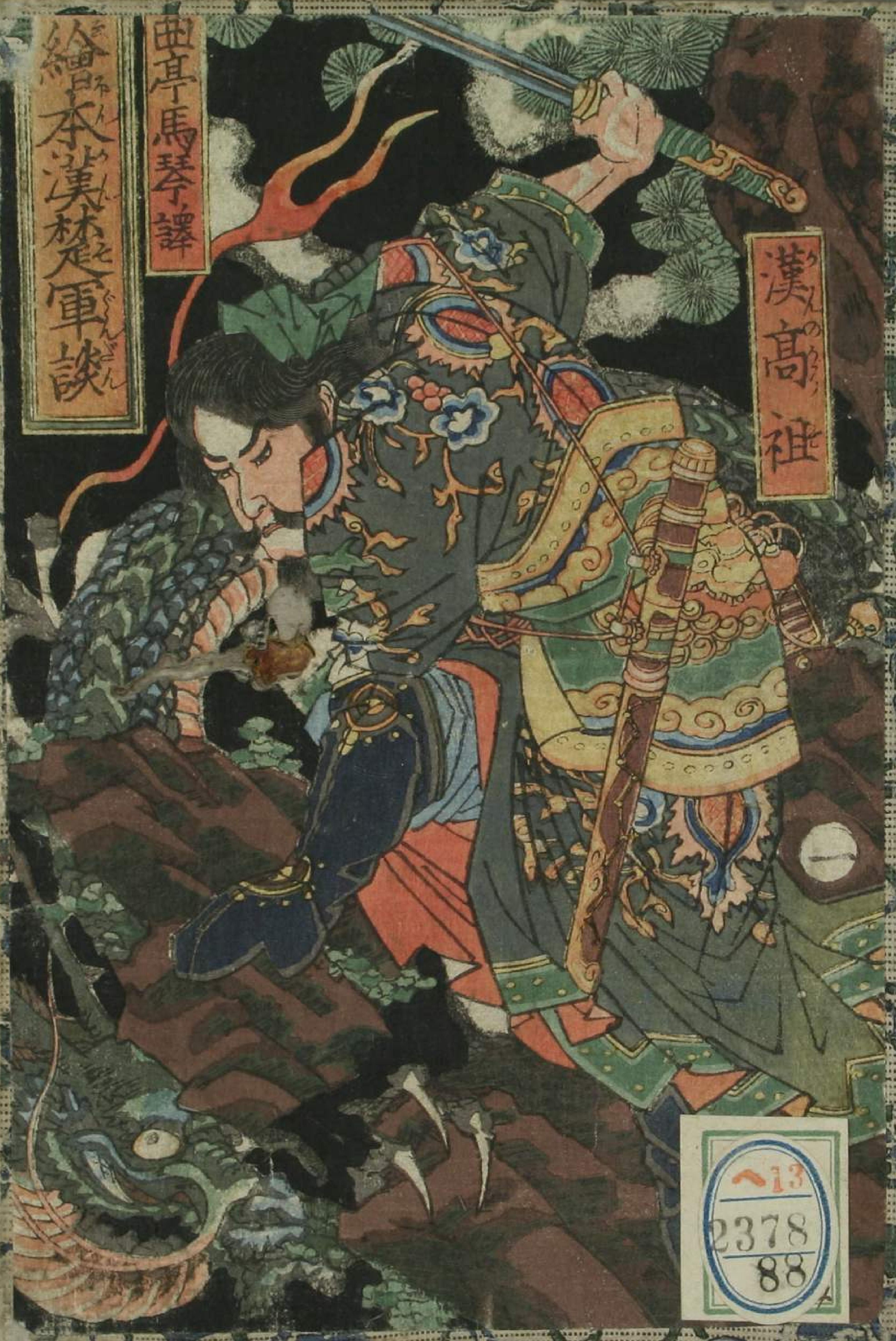
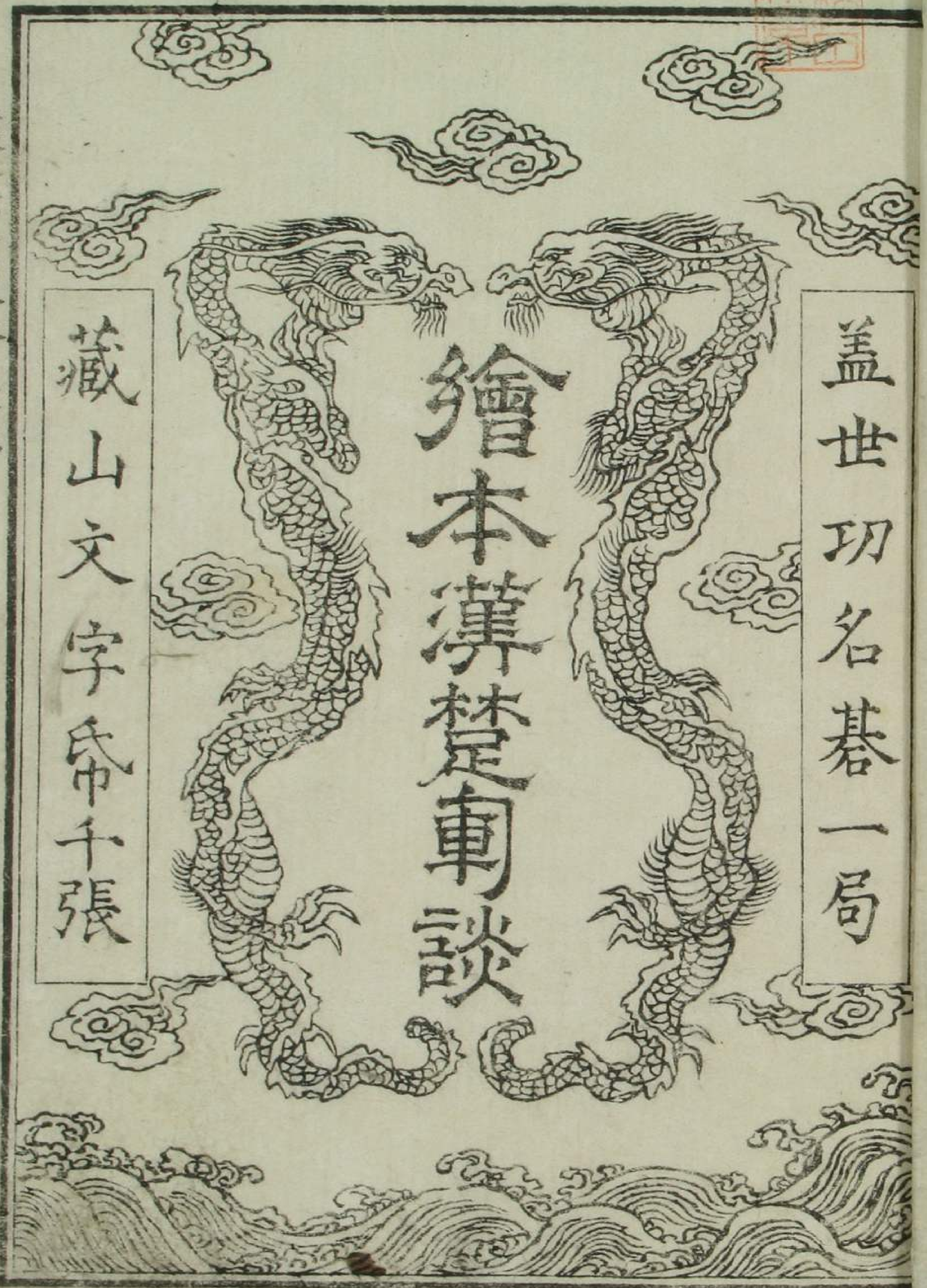
繪本漢楚軍談

曲亭馬琴譯



へ13
2378
88



蓋世功名碁一局

繪本漢楚軍談

藏山文字帋千張

國芳画

遠州[illegible]

海[illegible]書

馬琴紀

作[illegible]

へ 遠 3 2378 89 1

文政十二年

88

序

書肆僊鶴堂主人偶来訪之次謂予曰僕家藏畫本漢楚軍談十巻惜哉文略而過約畫拙而久巧加之磨滅又不可讀焉是以欲得先生之補綴而再刻之予曰夫稗史小説者雖叓取凡近而義發勸懲文俗而事過實者非識者之所採也且前史所録漢楚之興廢載記浩繁豈免圖冊之所能收哉書肆曰先生之言極善然令數十年之興亡瞭然於寸楮之小冊者幼學之小補書肆之大幸也屢辭屢請

於是乎摘厥要刪厥繁不日脫藁遂令止峰孝人圖之而不可其圖者書以記之不可其記者圖以補其漏凡十卷一百有餘頁此書全以畫爲主予惟標記其槩略而已畫成序其端

皇和寛政庚申上春提月雩夜呵研書于飯台著作堂南牕燈下

野史　曲亭主人

○盡本漢楚軍談原十巻あり其書畧約して具ならず板面も又磨滅せり故に今史記漢書および諸家の説によりて新に之を録す

○漢楚の興亡せし先に陳呉が軍ありて終に英彭が反あり両國の闘戦諸将の傳記等ことごとく記すことならず只全篇の要を摘み煩雑なるものを畧く

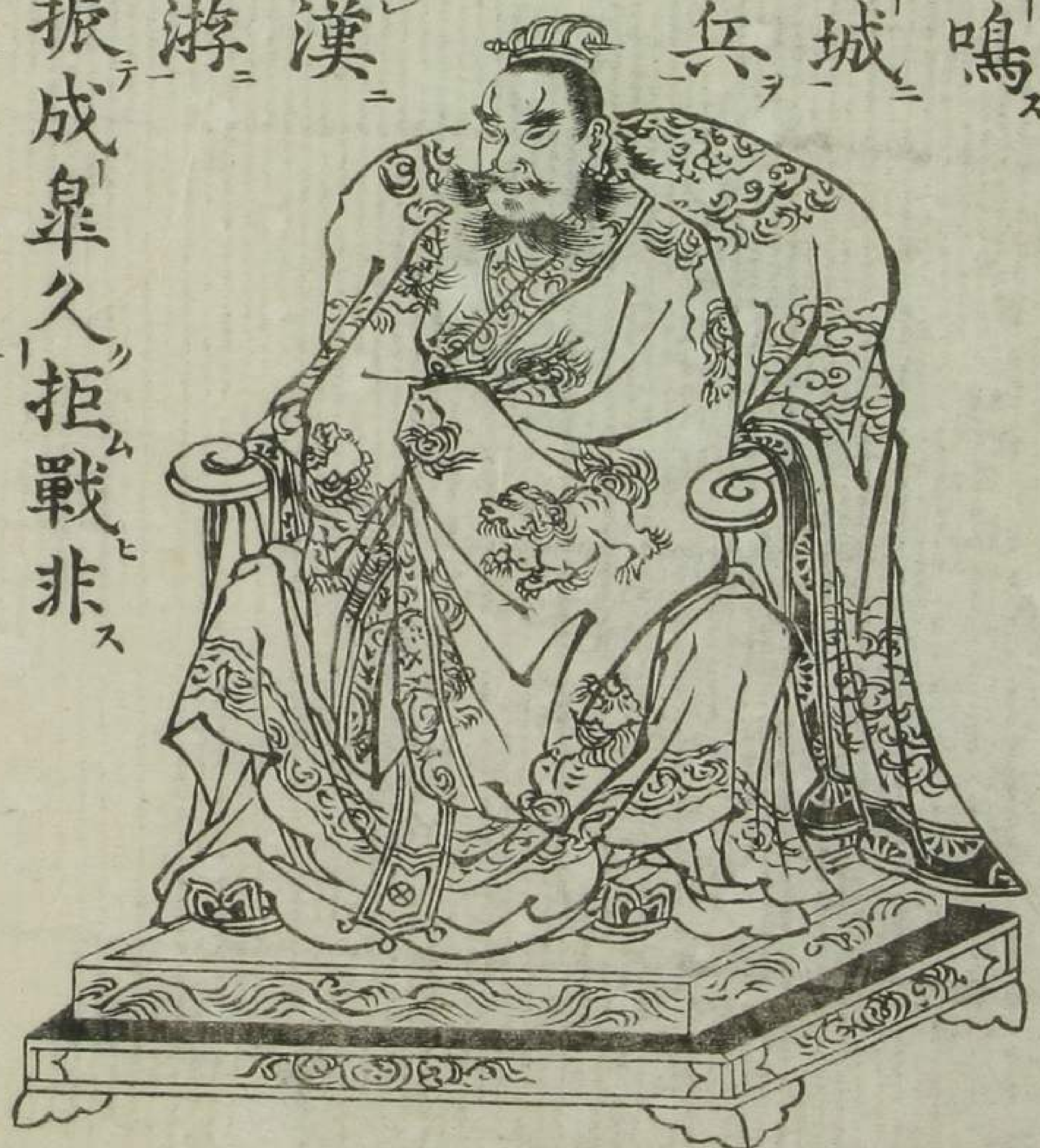
○韓信が背水の陣嚢沙の計等は世俗もよく知るところといへども趙斉の二國を攻めし時にあれを多く畧して畫をこゝに全本張数かぎりあるゆゑ餘事あるは紀がゆゑなり

○蒯徹偽りて狂客となり家録に韓信が屍を弔ひ楚王の追封を賜りて遺骨を淮陰に葬るなど傳記長く袖が畧しあるこれを録さず

○此書の大意畫紙をもつて主とし文をもつて佐とす依てその功おほくは畫者にあり且書に浅きもあるを畫して其袖紙およびあひ一紙を画しがたきものは記しおきことを佐く故に書畫相持して其意をのぶる通ずる主

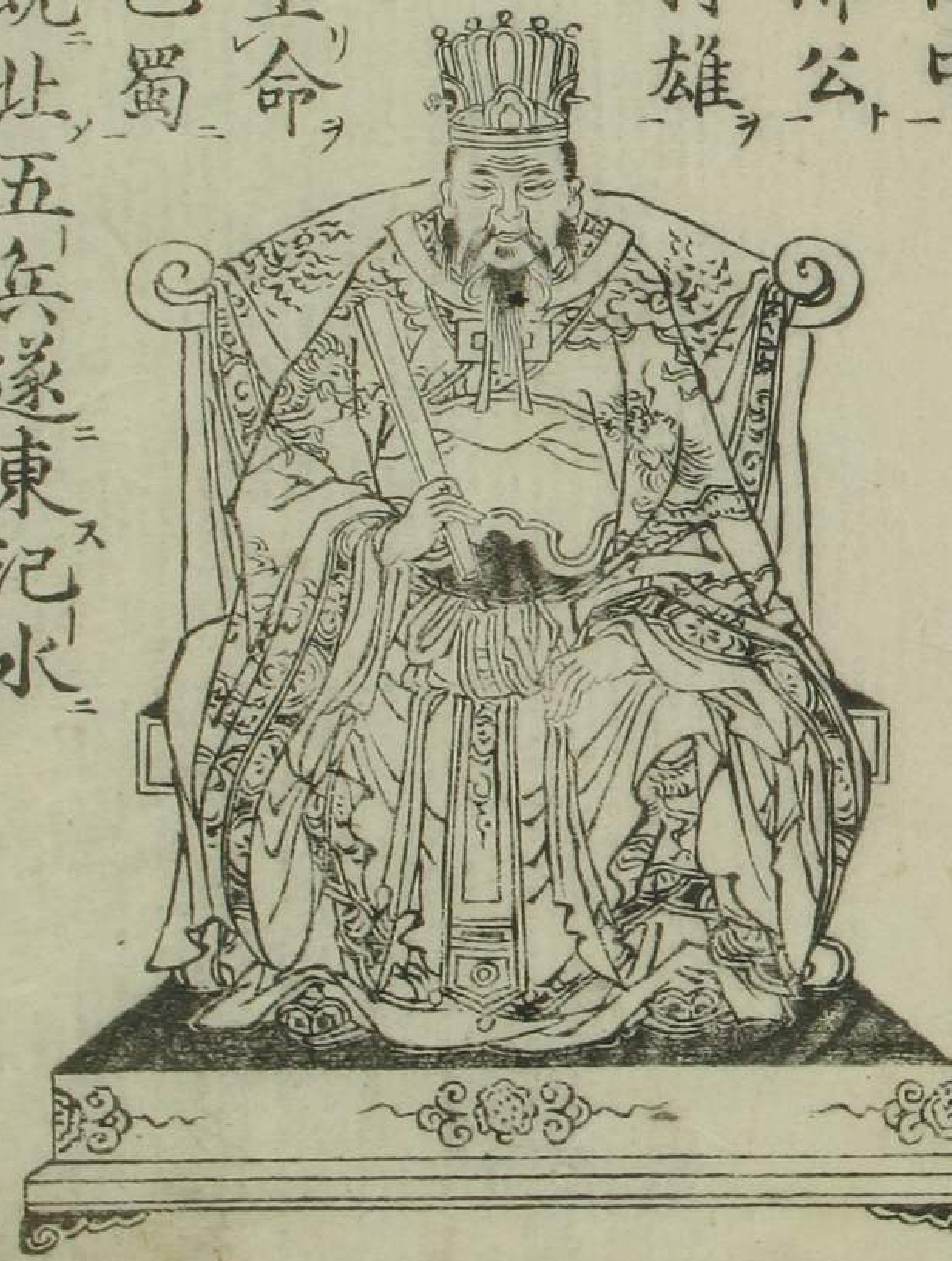
西楚覇王項羽

亡秦之鹿僞楚狐鳴
雲欝沛父劔挺呉城
勲開魯甸勢合碭兵
卿子無罪亞父
推誠始救趙歇
終誅子嬰逮約王漢
背関懐楚帝遷上游
臣迫故主靈壁大振成皐久拒戰非
無功犬實不與嗟彼蓋代卒為凶豎

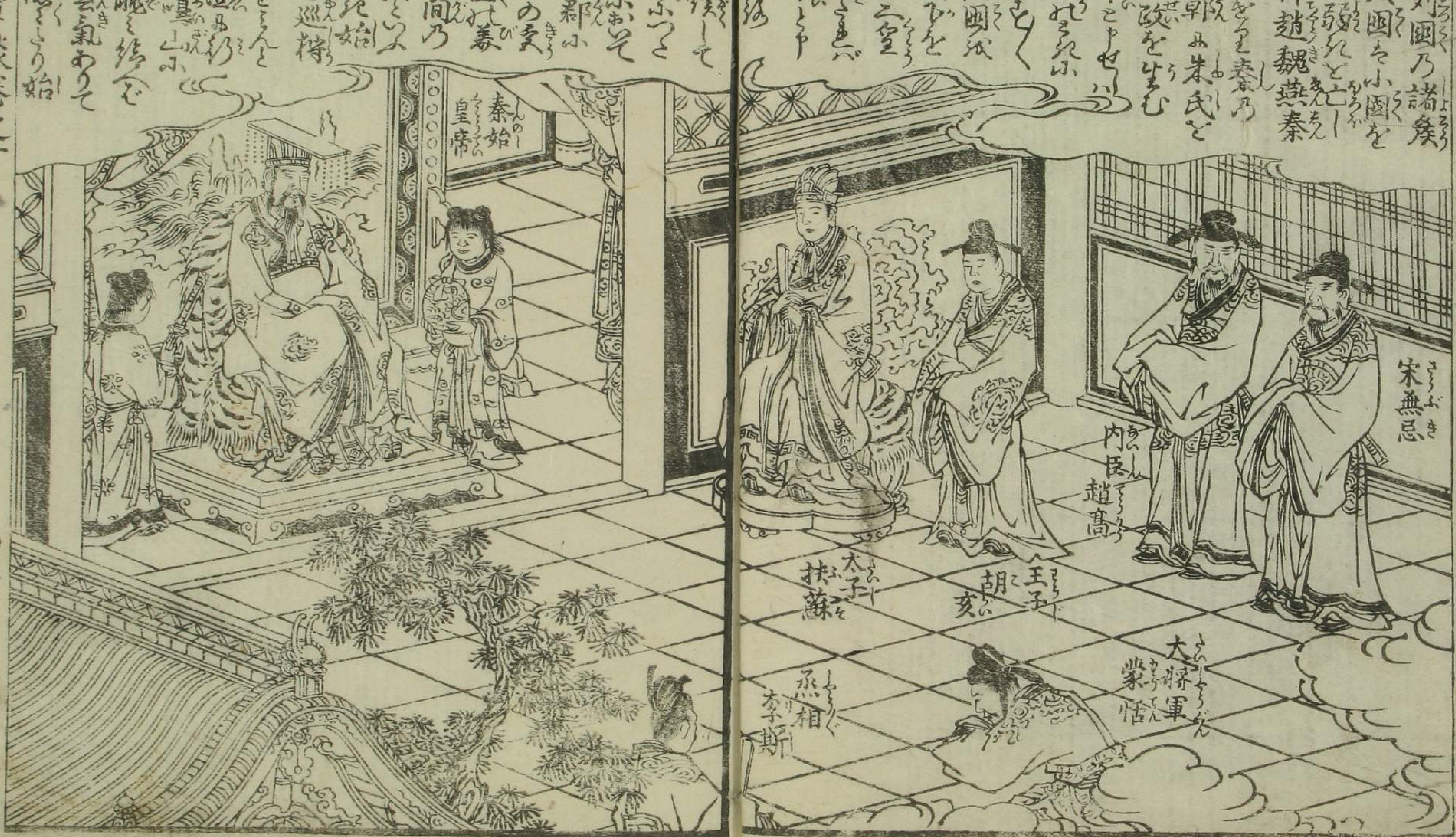


漢高皇帝

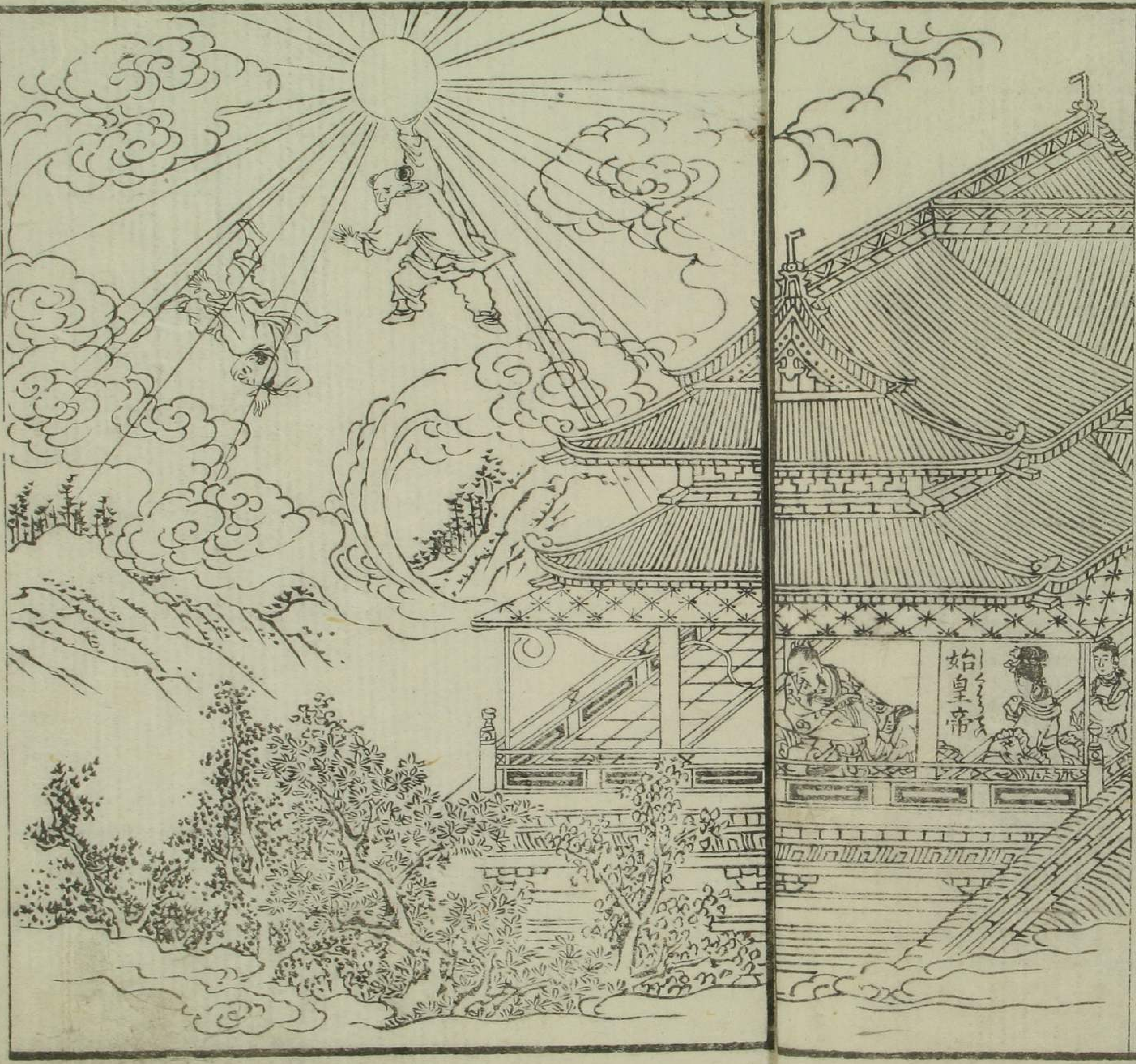
高祖初起始自徒中
言従泗上卽號沛公
嘯命豪傑奮發材雄
彤雲欝碭素靈
告豐龍變星聚
蛇分經空項氏主命
負約弃功王我巴蜀
實憤于衷三秦既北五兵遂東汜水
卽位咸陽築宮威加四海還歌大風



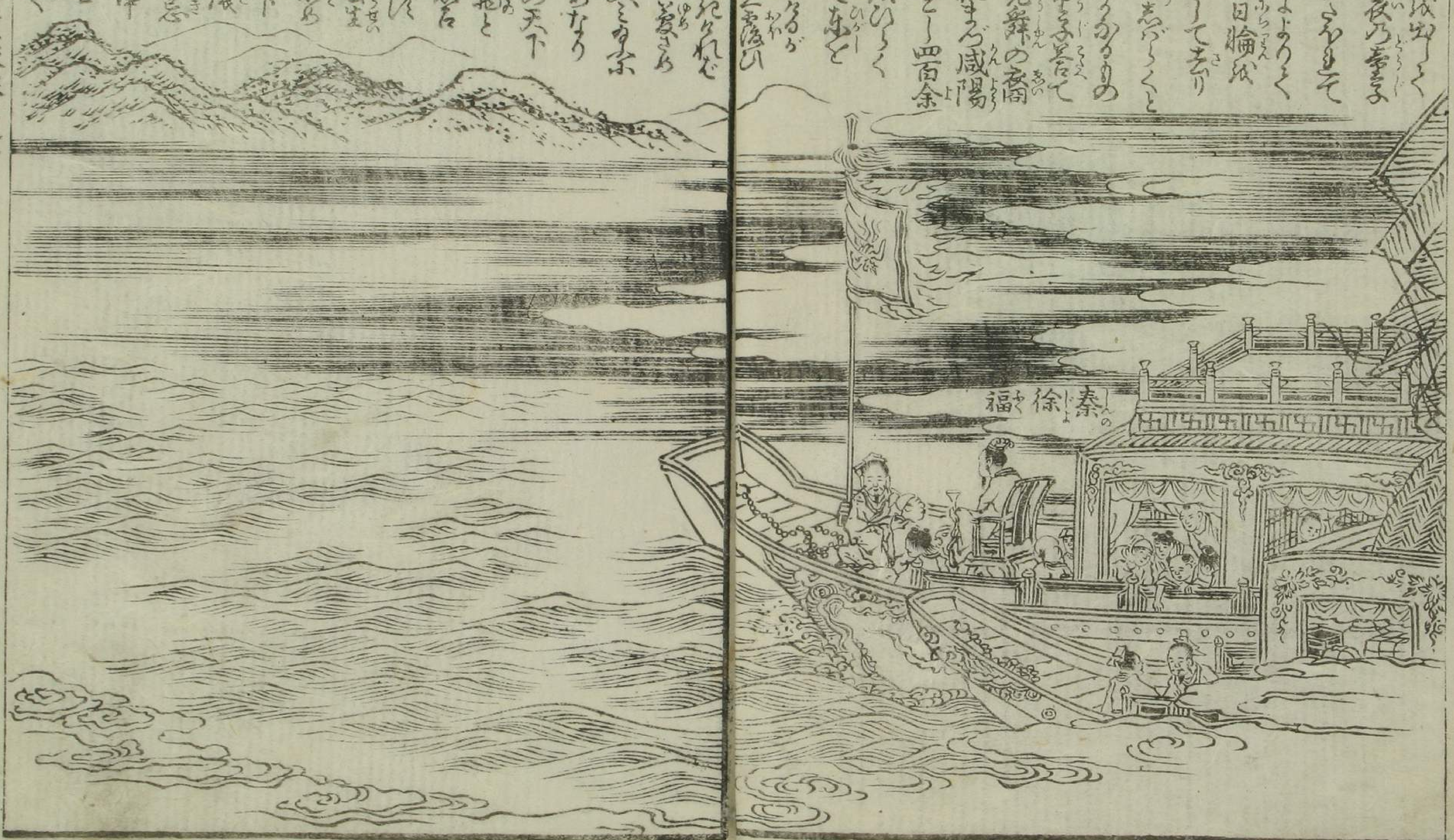
唐土周の末列國乃諸侯
大ひ起つて大國ハ小國を
おかし強きハ弱きを亡し
終に斉楚韓趙魏燕秦
の七國となりぬ爰に秦乃
荘襄王邯鄲ニ朱氏を
めとりて太子政を生む
後に始皇帝となせしハ
これなり始皇[illegible]
いさみて秦ます〳〵
強く遂に六國を
ほろぼして天下を
一統しその徳三皇
五帝ニこゑ過たれバ
とて始皇帝と申
奉れそのこ續
二世三世と相續して
正に位を万世につた
へんとおもふにぞ
天下を三十六郡に
わかちおほくの宮
殿を立諸國の美
女をあつめ人間乃
極楽ともいふべく以
て遊おぼしめし始
皇帝天下を巡狩
して民の風をミんと
思召て隴西ニ行
幸ありて雞頭山に
登りて楼に眺を經て
東南のかたに雲氣ありて
天色ハ光り陰くもり始


秦始皇帝
内臣趙高
宋無忌
王子胡亥
太子扶蘇
大将軍蒙恬
丞相李斯

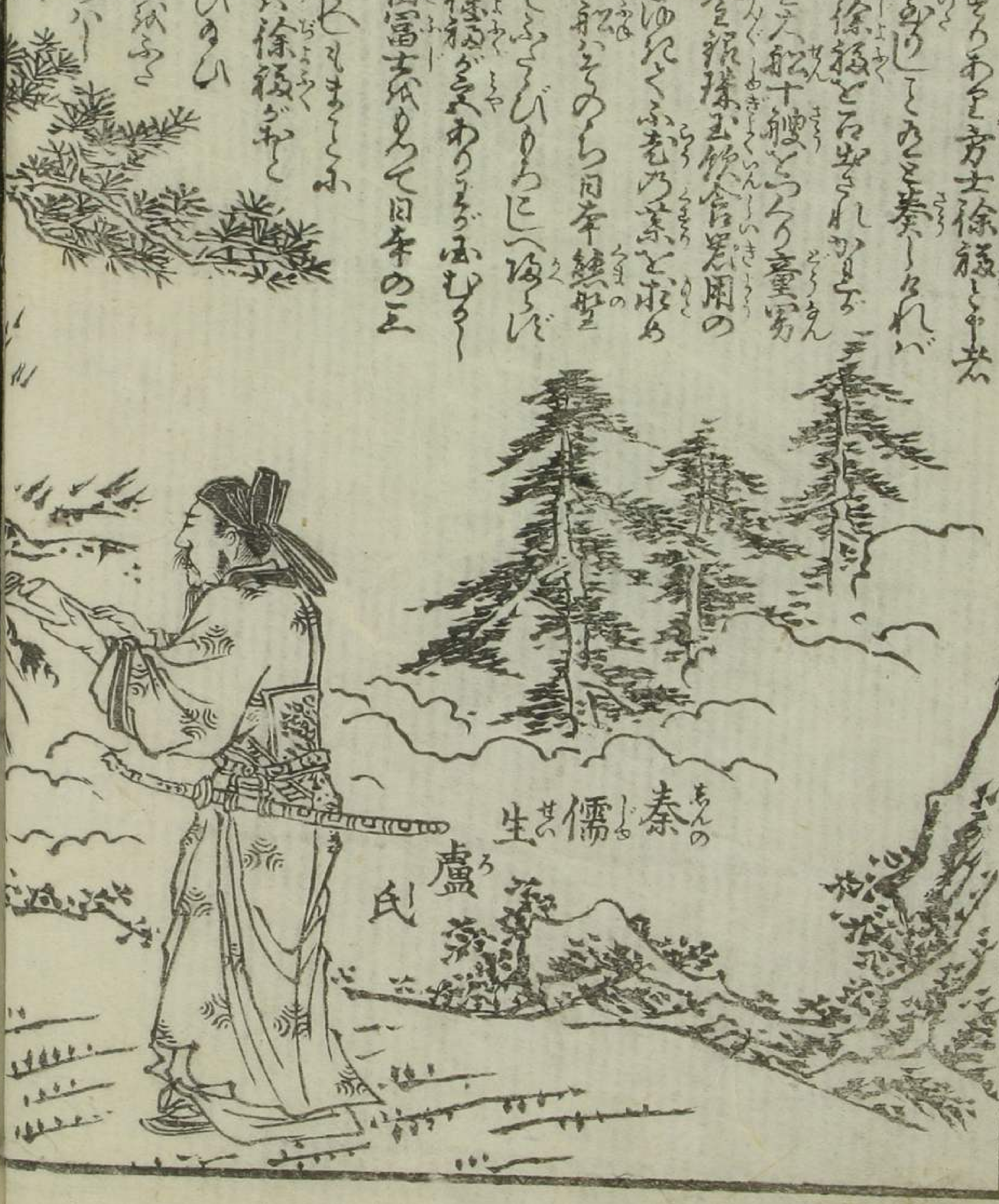
皇帝すでに位につき給ひしかば雲気をもつて天下にしめさんため東国を巡狩し鄒嶧山に石をたてて其功徳をかゝしめ東嶽太山を封して太阿といふ宝剣を山のふもとにうづめ南郡によりて咸陽宮へ還幸あるかの世にまた始皇雨にあひ太山の松かげにやすらひ其松を五大夫に封じ給ひしも此ときのことなり其後一夜東南に雲気をあらはしはなはだしかりける日群臣ゐならびたるに よりて東苑に行幸して花をながめ顕慶殿に上らせ給ひけるがたちまち天地もくらく なり震動して金色の日輪は光をうしなひ一人の童子青き衣を着たる帝の面八力士のごとくなる が東の方より飛来り日輪を取て逃んとする時又紅の衣を着たる帝子南の方より走 きたり我天帝の命をうけたり其日輪をかへせといひてたがひにあらそひうばひ合しが青衣の童子 いきほひ強く紅衣の童子をつゞけ打して七十二度まで打けるを紅衣の童子わたく



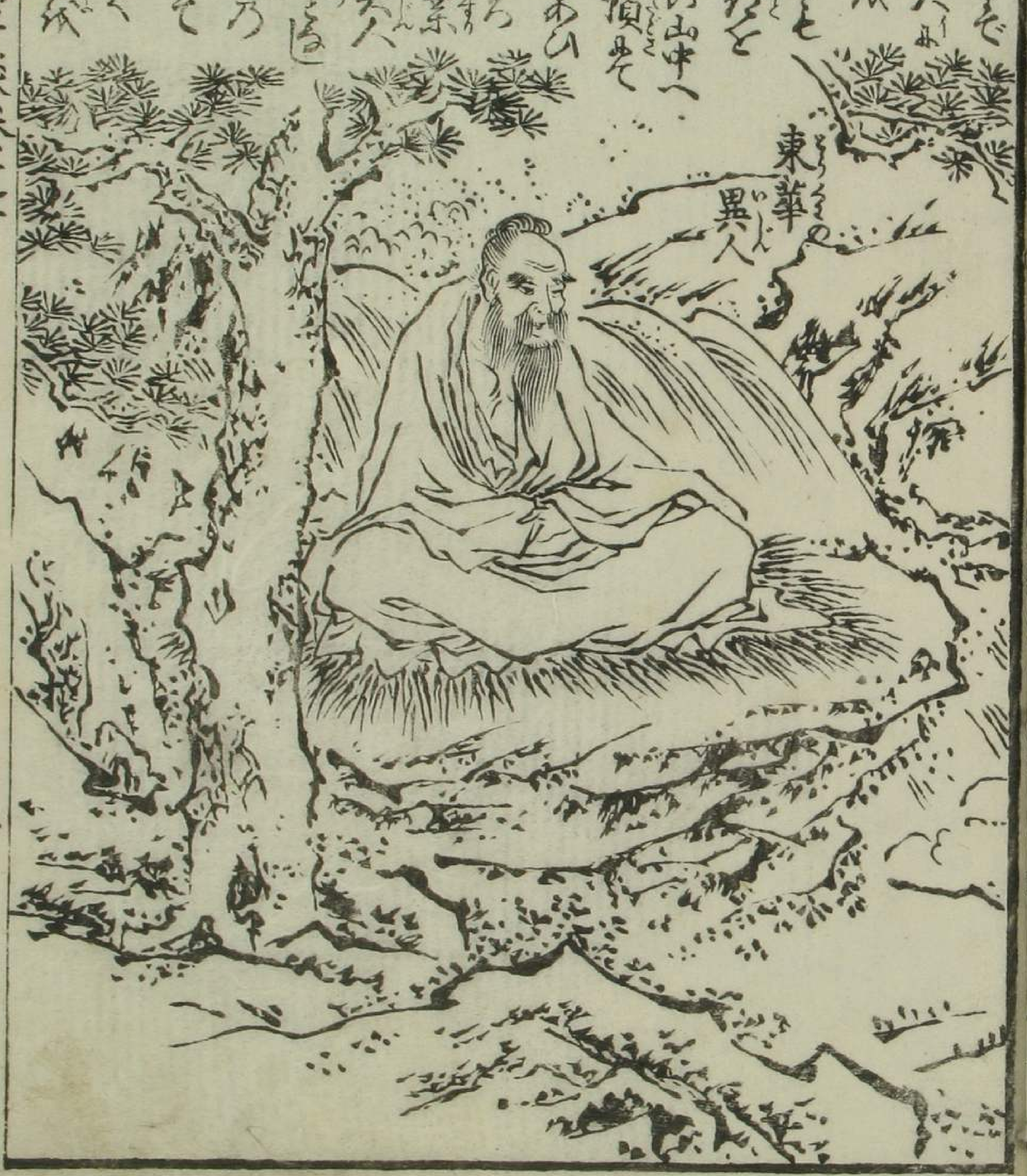
徐ハれらハ飛出しく一ツび打バ青衣乃童子たちまち地にたふれて死ぬなり是によつて紅衣の童子日輪をいだき東をさして去りぬこれを始皇志ばらくと汝ハいかなるものぞと問のへハ帝子居てこれハ是堯舜の裔豊沛に生れまづ咸陽に入て義を世にし四百余年のちまで代ひらくなりといひすて東をさして飛さりぬるが俄に雲霧立覆ひ紅の光をらめき見えざれば始皇忽然と夢さめ身ひつくゞ考へて見るにこハ不吉のゆめなり久しハかゝる秦の天下終にハ他人の物となるべき事を思召て心ならずとふかく此上ハとにかく長生不死の薬を求め万世までも天下の君たるべしと議し給ふに方士宋無忌申けるハ東海の中に三ツの仙山あり此山に仙人多く



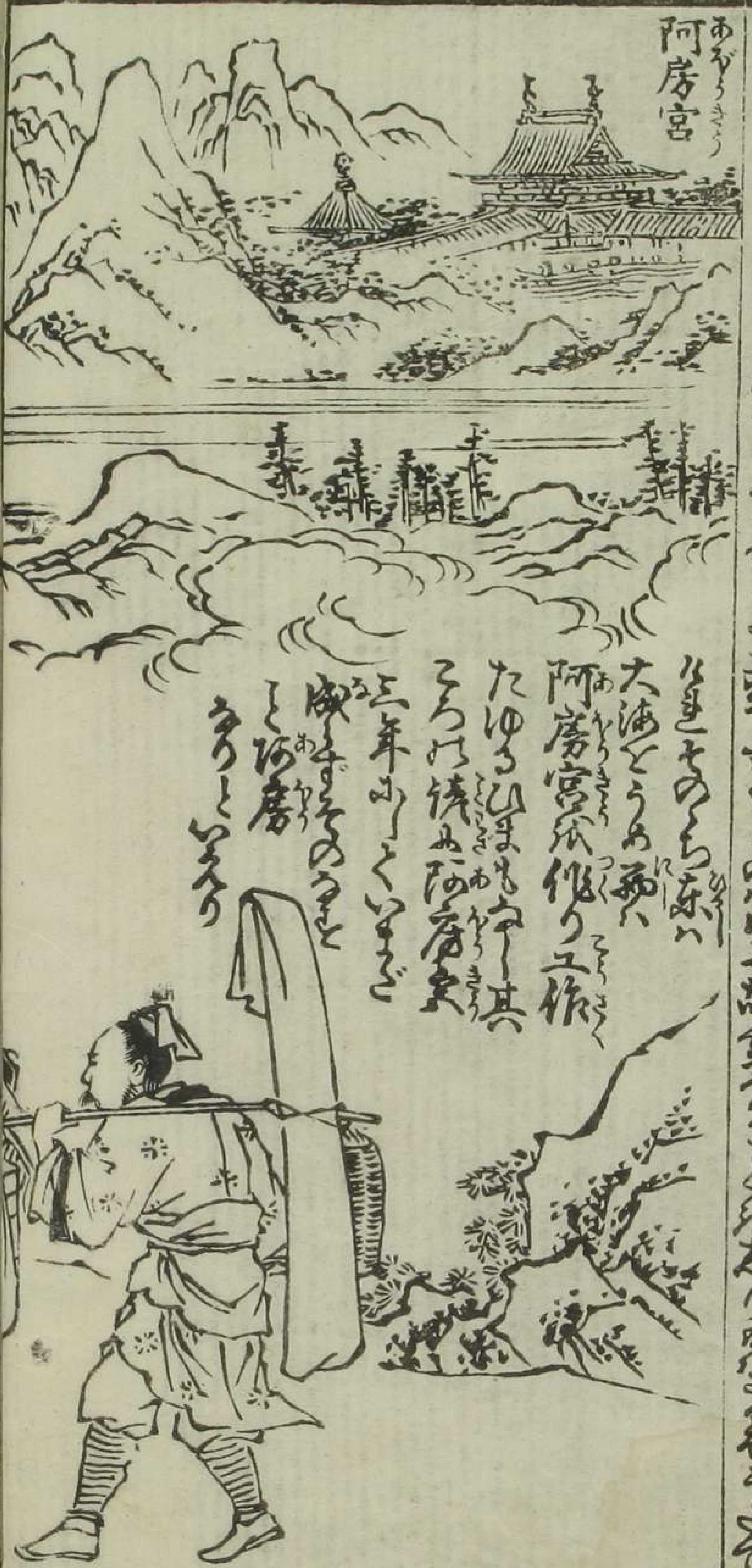
往て不老のくすりありと方士徐福といふ者むかし蓬莱にありしことを奏しければ始皇すなはち徐福を召出されかれがのぞむにまかせて大船十艘をつくり童男童女又百人に金銀珠玉飲食器用の物をのせ東海にゆかしむ不老の薬を求めさせけるに徐福が船そのまゝ日本熊野浦へ漂着してふたゝびもろこしへ帰らず今紀州熊野に徐福が塚ありそのすゑもあるべしより熊野熱田富士をもつて日本の三蓬莱といひつたふるもまたこゝにゆゑあり始皇は徐福が帰るをまてどもまちがたく又盧生といふものにおほせふたゝび東海へわたらしめ和に盧生勅使



として海岸まで出たるが烟波大いに立てとゞまりてさしてゆくべくもあらねば遥かの道を止め大岳の山中へ分け入東華の頂にて計らず異人にあひけるに盧生よろこびて不老の薬を求むるに此の異人これをゆるして洞より立より一巻の書を取出して盧生にわたして汝これを此まで



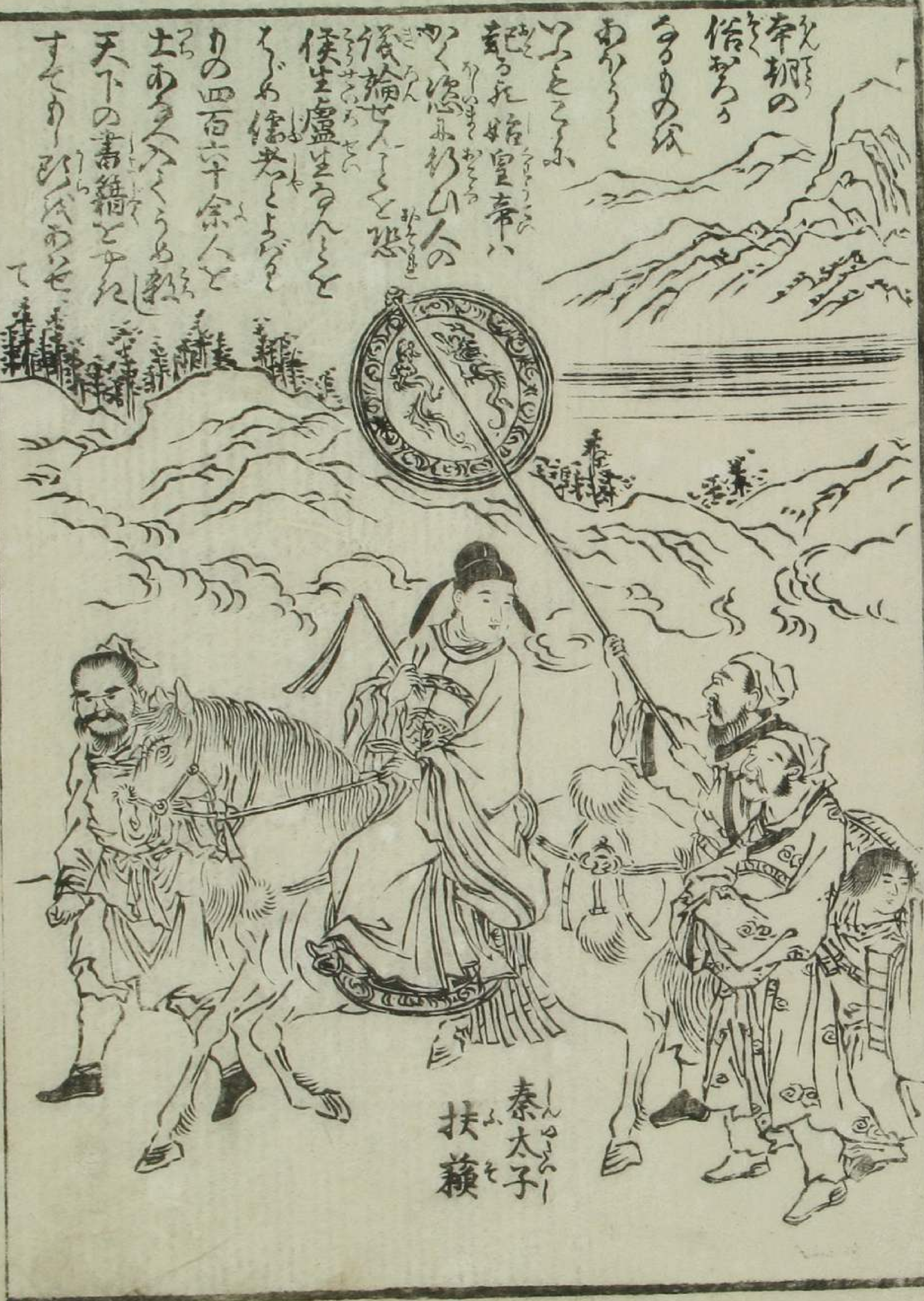
始皇に年ごろ死生命あり何ぞ不老の薬あらんとぞ石上に伏してふさびのいそに盧生ハそれより咸陽へかへりありしことどもを奏聞してかの仙書を奉りけれバ始皇大きによろこびひらきてあまねく見給ふところが蝌斗の文字なれバ手々なれがかし詞にて中くよめつ給乃人へさとるべくもあらず丞相李斯よろしく秦を亡す者は胡也といふ文字とよみとけバ扨は秦の天下を亡ぶれものハ胡なりとて大に驚き給ひ人夫八十万をさづけ中国と夷狄の境に万里乃長城をきづきづせおびただしく国用を費してつひに秦を亡ぼすものハ胡子胡亥なるを志らざるぞうたて



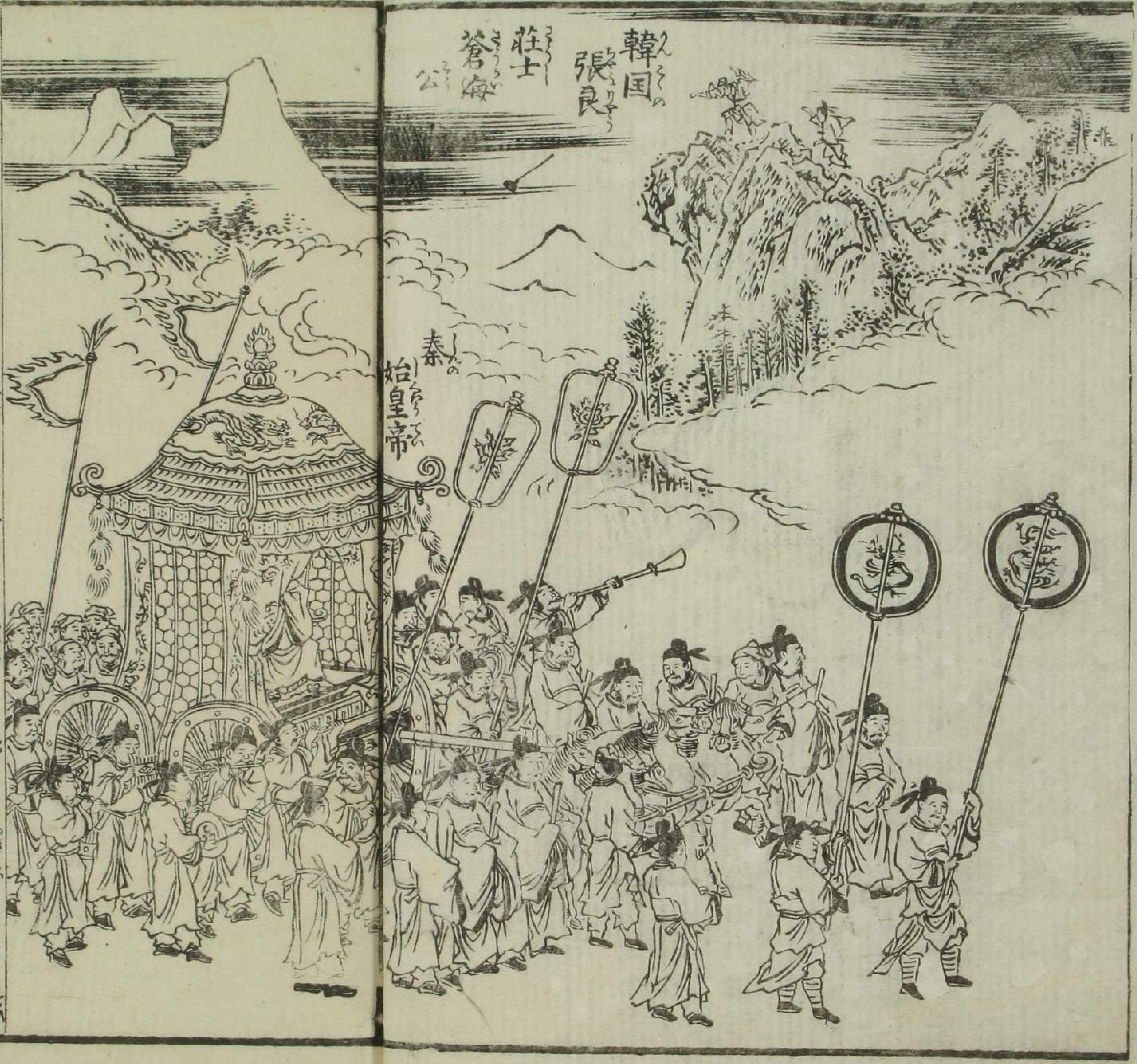
阿房宮

然るそのゝち東ハ大海をうめ西ハ阿房宮を作り工作たゆるひまもなし其ころの諺に阿房宮三年にしていまだ成ずそのうちをして阿房ありといへり

扶蘇の俗なるかあるものあらんといとてふ諫られ始皇帝ハかく怨ふ約の人の議論せんことを恐れ侯生盧生らへことをすゞめ儒者とよばるりの四百六十余人を土あなへうづめ殺天下の書籍を取てすてゝ郡県をおこせて

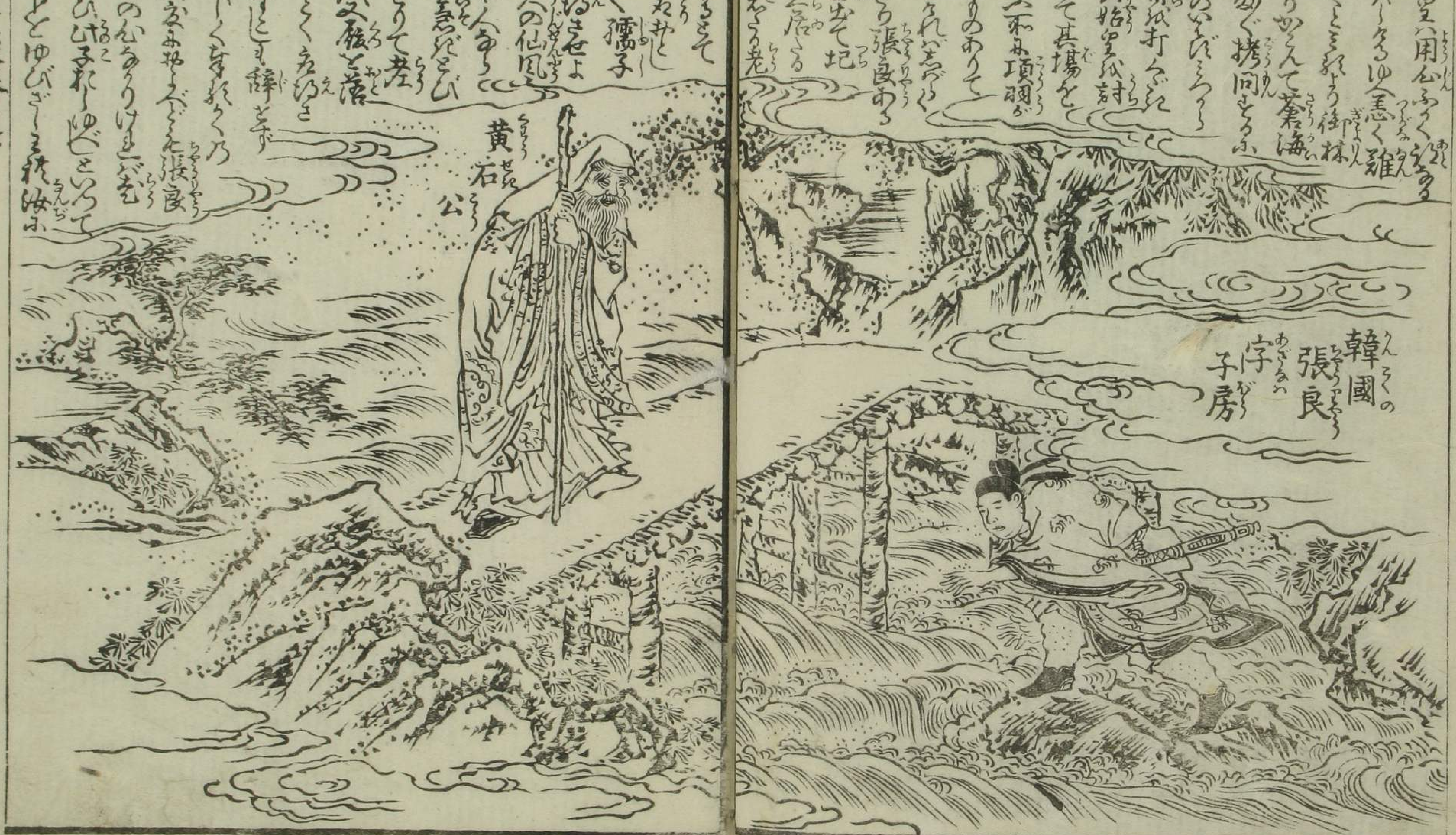


秦太子扶蘇


韓国の張良
壮士蒼海公
秦の始皇帝

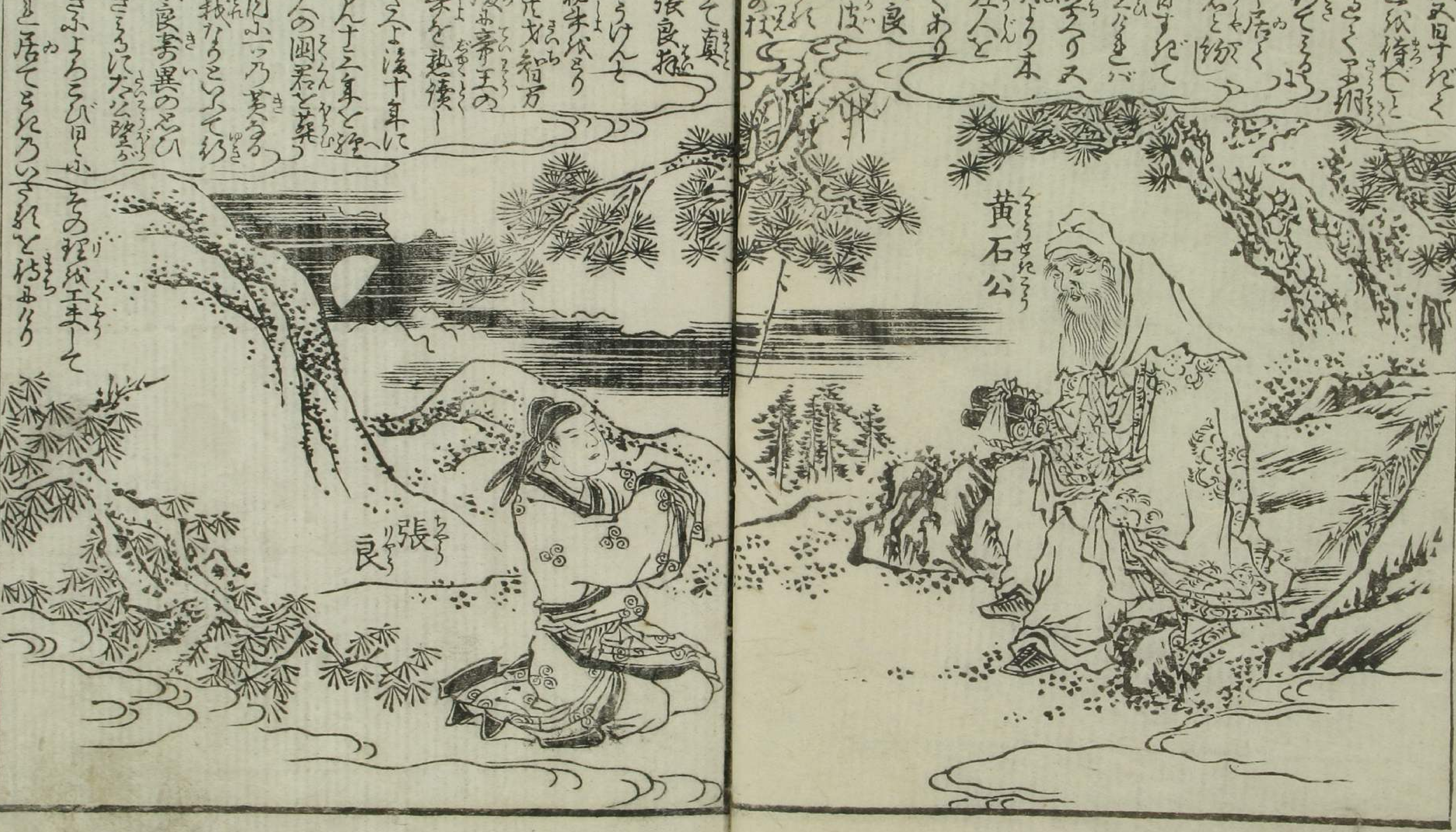
物ぐるはする老人をば市に出して切らんと罵られけれバ太子扶蘇これを諫めけるに始皇大に怒り太子扶蘇を追出して上郡へつかハし蒙恬と共に北胡の境を守らせけり○其比韓国の人に張良字ハ子房といふものあり其身五代韓に仕へて宰相たりしが始皇に国を亡されけれバ骨髄に徹して忘れず何とぞ始皇帝を討て古主の仇を報ぜんと思ひしが天下の壮士を求めけるに浅山といふ所のほとりなる滄屋にて一人の壮士を得たり其人姓ハ黎氏にて滄海に住せる故世の人蒼海公とよびける其身の丈一丈力よのつねにすぐれし重サ百斤の鉄槌をつかふ是も秦の悪政をうらみて当時の隠かくれ住しを張良悦んで是をその家にかくまひおきし始皇帝をねらひけるに此時始皇帝陽武県を巡狩しぬるよし聞えしかバ張良蒼海公を伴ひ博浪沙といふ所に待受て始皇の巡幸を伺ひける蒼海公かの鉄椎をなげつけ先なる車をうち砕

碎かれけれど始皇は用心ふかくありける副車にのりて在しけるゆへ恙なく難をのがれ給ひけりかくて急に御林護衛の武士どもすゝんで蒼海公をとらへんとさわぐ拷問せらるに蒼海公あへてものいはざりけり舌の根をかみきり首を打たれ死ければ張良始皇を討そんじ足にまかせて其場をのがれ下邳といふ所に項羽が一族の項伯といふものありてちかしき友なりければ是をたのみて隠れゐる張良ある日下邳の城外に出て圯橋のあたりに立居るに黄なる衣を着たる老人橋の上にきたりて穿たる履をとりおとし張良にむかつて孺子我が履をとりてはかせよといふ張良老人の仙風道骨ありてさだかに人ならざるを知りければ喜びてかの履をとりて老人にはかせ又履を落してとらせる事たびたびなれど張良さらに張良すこしも辞せずみとりてはかせしむる事かくのごとくする事三度に及べども張良いさゝかも怠慢の色なかりければ老人かんじていひけるは孺子教ゆべしといひて傍なる木の下をゆびさし又汝に

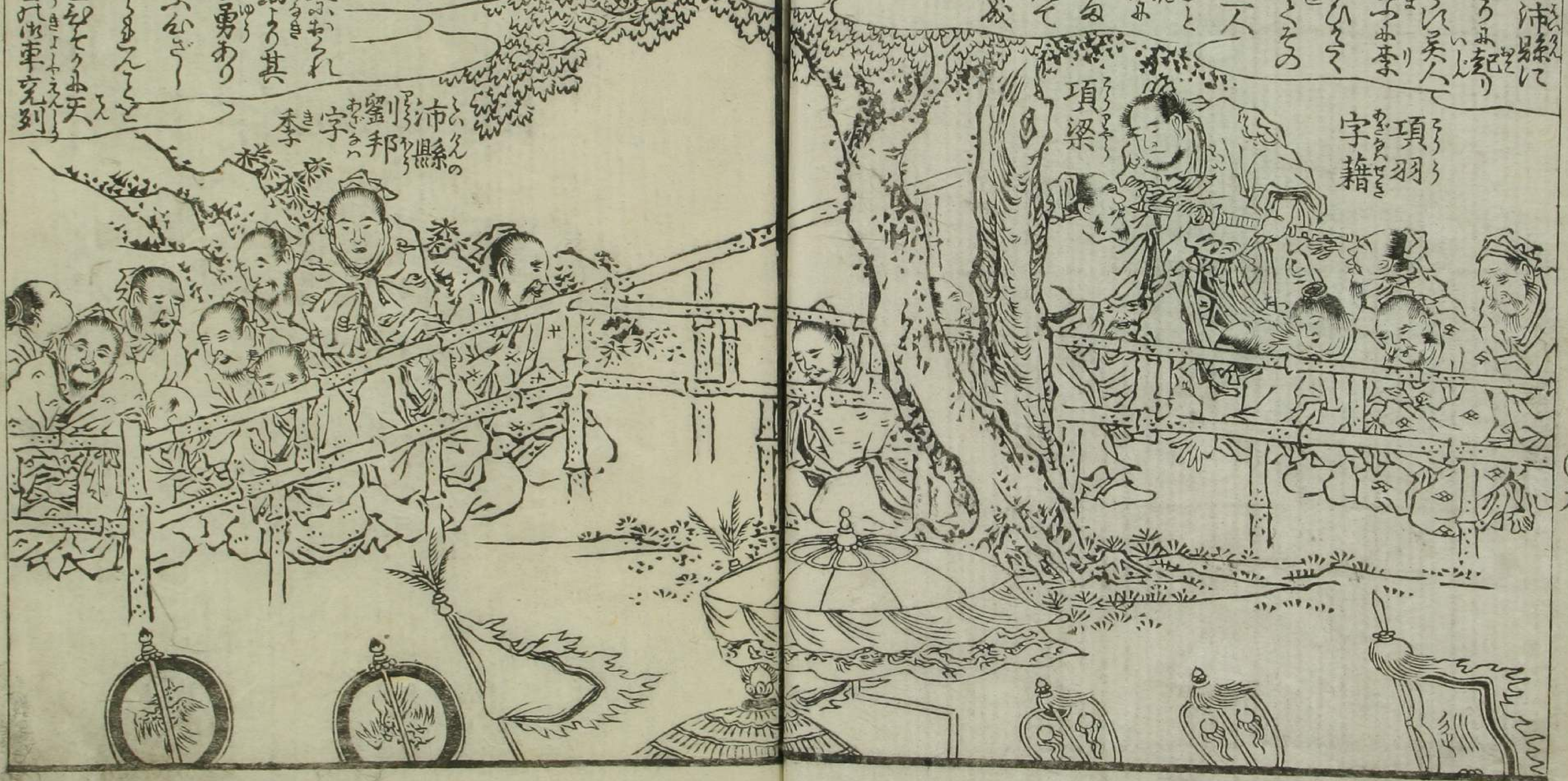


一巻をさづくべし汝又日すぐれてく
こゝに来りてまゝ一紙待せと
去されば張良又日るとく早朝
みかのまだかれぬうちに行てみるよ
老人今木の下に坐し居たく
大きに悦びて汝長者と約し
おそく来れる又日すぎて
早朝に来れと云ければ
張良ちからなく立かへり又
日をまちて此度は宵より来
りけるにまち居て老人を
まちゐたれば志ばらくあり
て老人来り張良
見てうけにすゝみこれは懐
の中より一巻を取出して
張良にさづけて行の杖

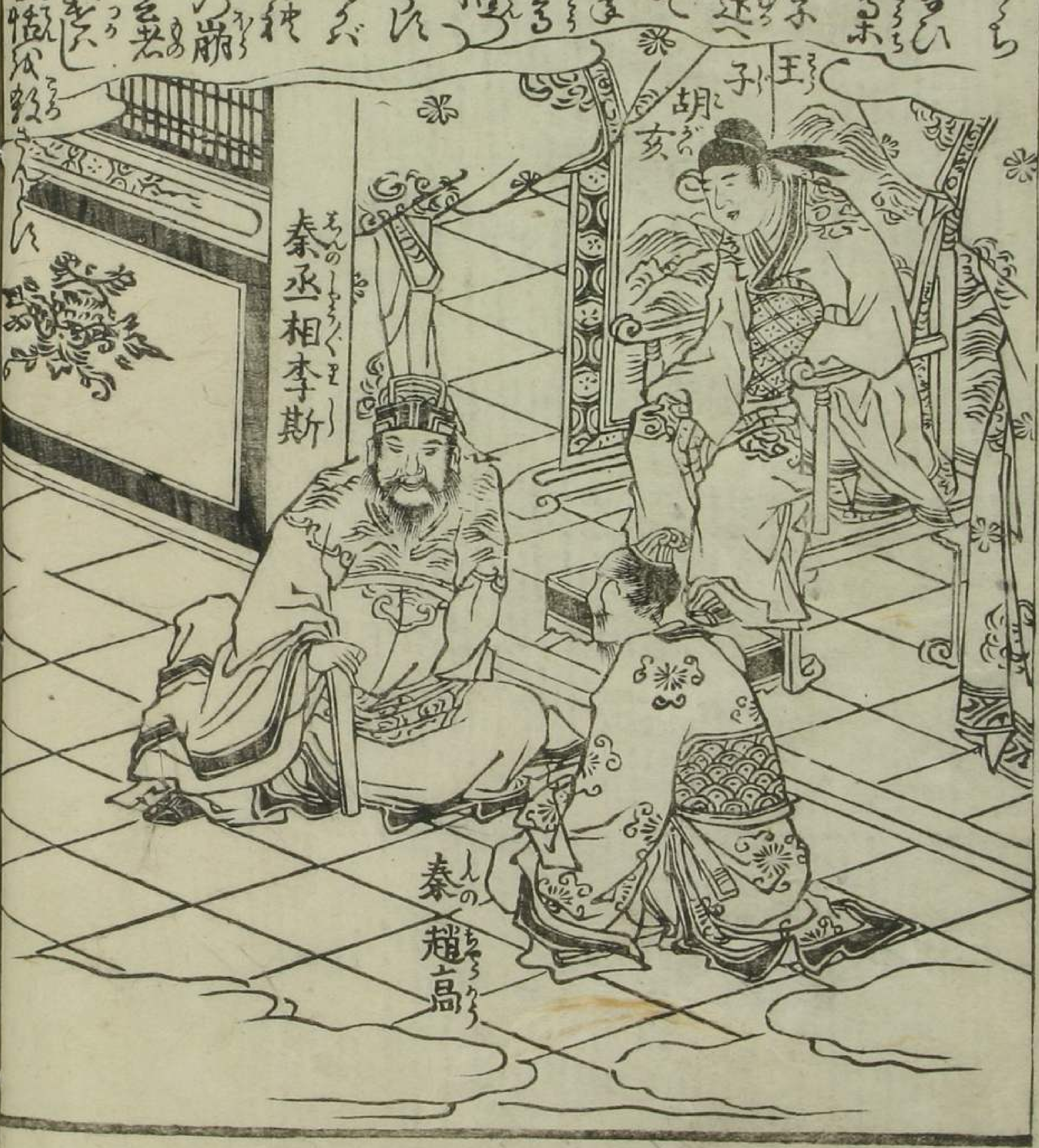
とて飄然として去る眞
の神仙なりけれは張良拝
伏して頂き書をひらけんと
見て又老人の三略の秘書なり
出し汝年まなばゞ元戈智方
人にすぐれ後に帝王の
師となるべし汝この末を継續し
て功名を万世につたへよ後十年にて
して汝が起らん十三年を経
て天谷城の東に一人の國君を葬
らん其時空地の間に一つの黄なる
石あらば是すなはち我なりといひて行
方なく失にければ張良奇異の思ひ
をなしかの手に書をひらきみるに太公望が
兵書なりければ大きによろこび日々にその理を工夫して
項伯が家にかくれ居て時のいたるを待けり

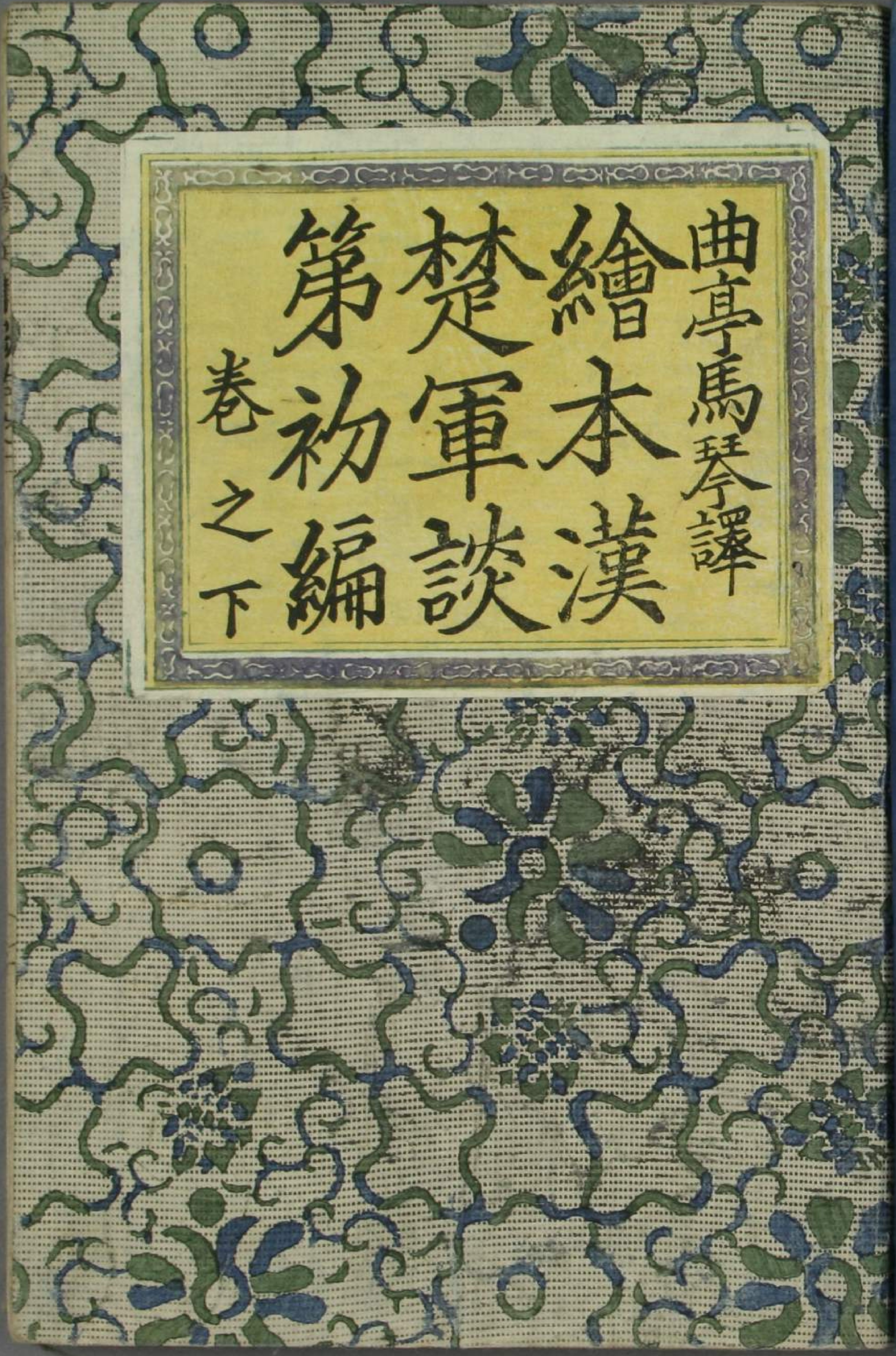


始皇帝ハ東南を巡狩して沛縣に至り給ふに五色の雲氣たつところに起りけれバ李斯と云く此地からハ異人ある也早く殺さるべしと宣ふに李斯百姓の騒動せんことをおもひて諫めけれバ始皇げにもと思召てそのまゝ止みになりて扨沛縣に一人の英雄あり劉邦字ハ季といふその身いやしくして民間に有て始皇の巡狩し給ふありさまを微に窺ひて美しくおもひなんぞ大丈夫たるもの當に此のごとく成べしといひし是より義兵を起し天下を治めんとするの心あり後に漢の高祖と申せしハ是なりかくて始皇の御車會稽の方へ巡狩し給ふ其の比北方の荘にいたりや出て始皇を見て我これを殺さんといつて劔をぬけて出んとするところをかたへよりアヽヤと制し止めたり此人ハ楚國の大将項燕が後にして下相の人に項羽字ハ籍といふものなりそのおやかたハ梁が伯父項梁なり項羽幼くして父におくれ伯父項梁にやしなはるゝが幼より其器量人にすぐれ万夫不當の勇ありて常に義兵をおこさんと思ふ心ざしありけれバ此日始皇にあたらんとて恐で二人呉楚の間にのがれて天下を奪ハんとするかくて始皇ハ御車究到



の地において返らぬ儀になりたまふ御かくれに已に危くなりたまひ召しが丞相李斯趙高にとられし朕世をさらバ太子扶蘇を上郡よりよび迎へ位を傳へよと遺詔ありて崩御したまふ在位三十七年壽五十なりしと爰にかの太子扶蘇大将蒙恬とそのころむかへにかゝれ是によりて扶蘇位につかバ身に禍あらんと案じて秘り李斯とすゝめて始皇の崩御をふかくかくし閻楽と名君にかたらひ詔を換て上郡へ遣し勅詔と偽り太子と蒙恬を殺さんとしけれ



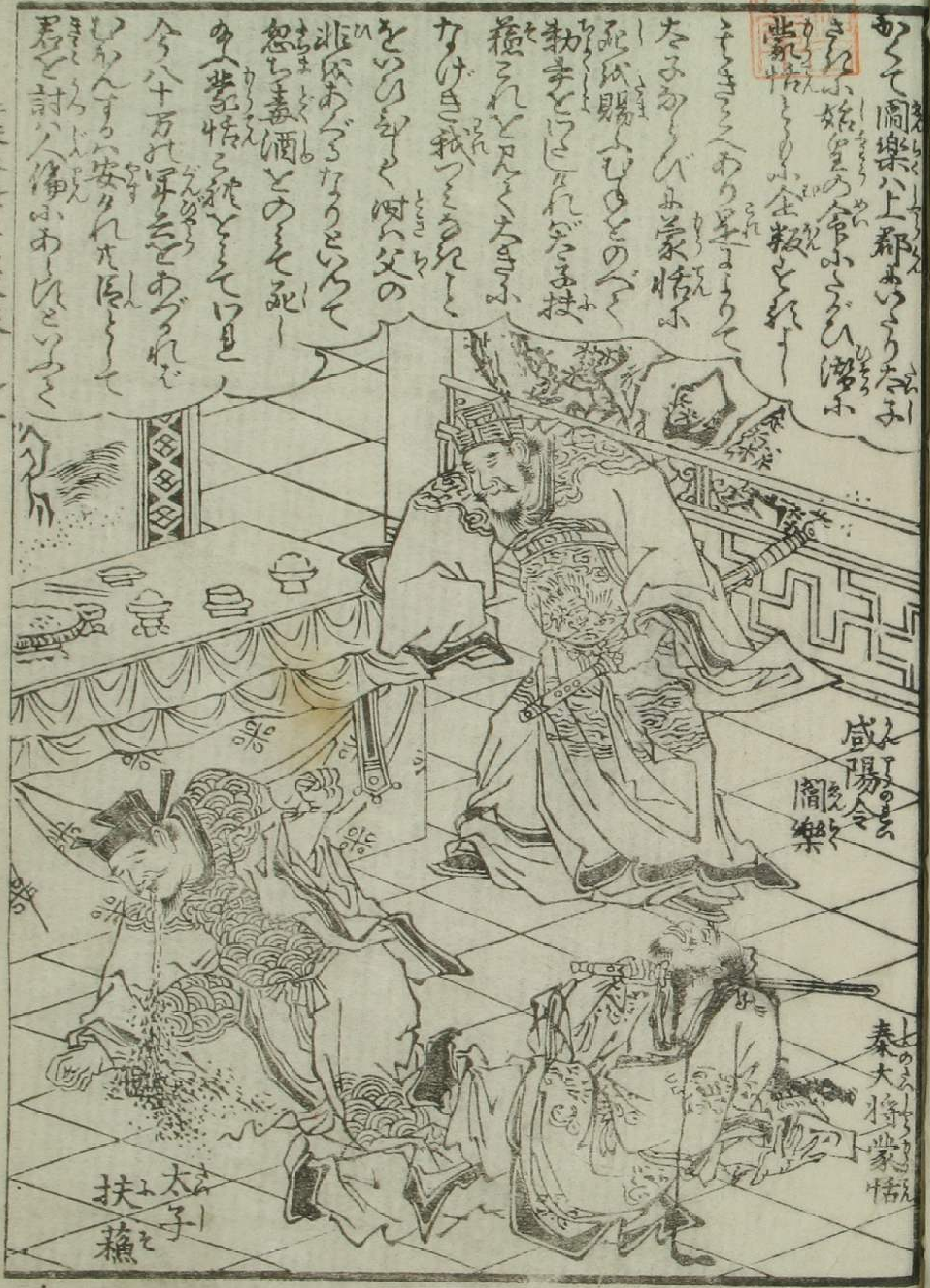


曲亭馬琴譯

繪本漢楚軍談

第初編

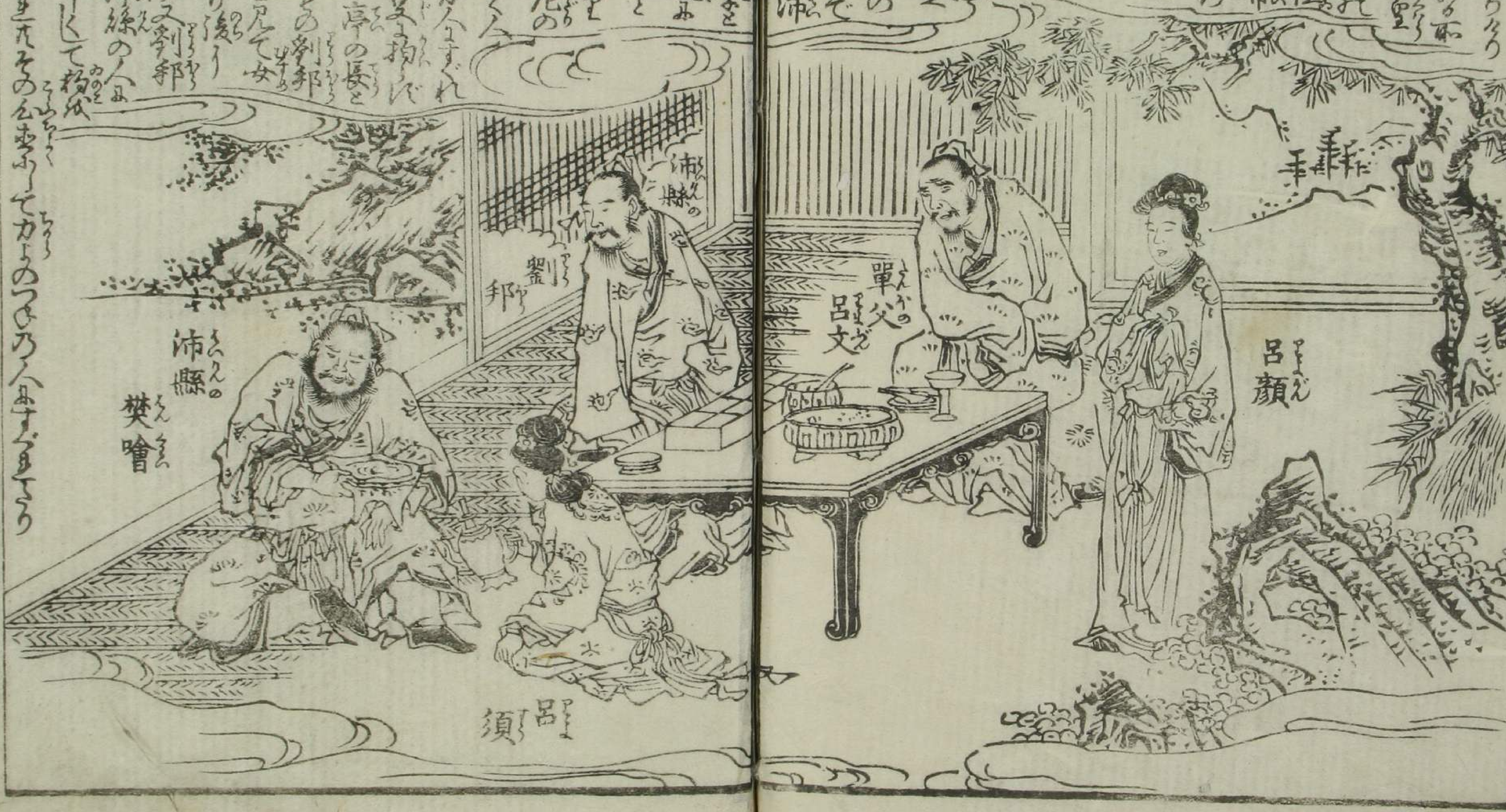
卷之下



かくて閻楽ハ上郡にいたり太子扶蘇に始皇の命といつはり潜に蒙恬ともに全殺とおもひしそもそもこれハわが罪なりとて太子および蒙恬に死を賜ふむねをのべて勅書をわたしければ太子扶蘇これを見るやたちまちになげき是につくあられしとをいひけるハ父の非分にあたるなりといひて忽ち毒酒をのミて死しぬ又蒙恬ハ彼をとゞめていはく今八十万の軍兵をあづかれどむほんする安かれた心して君を討ハ人倫にあらずといふて

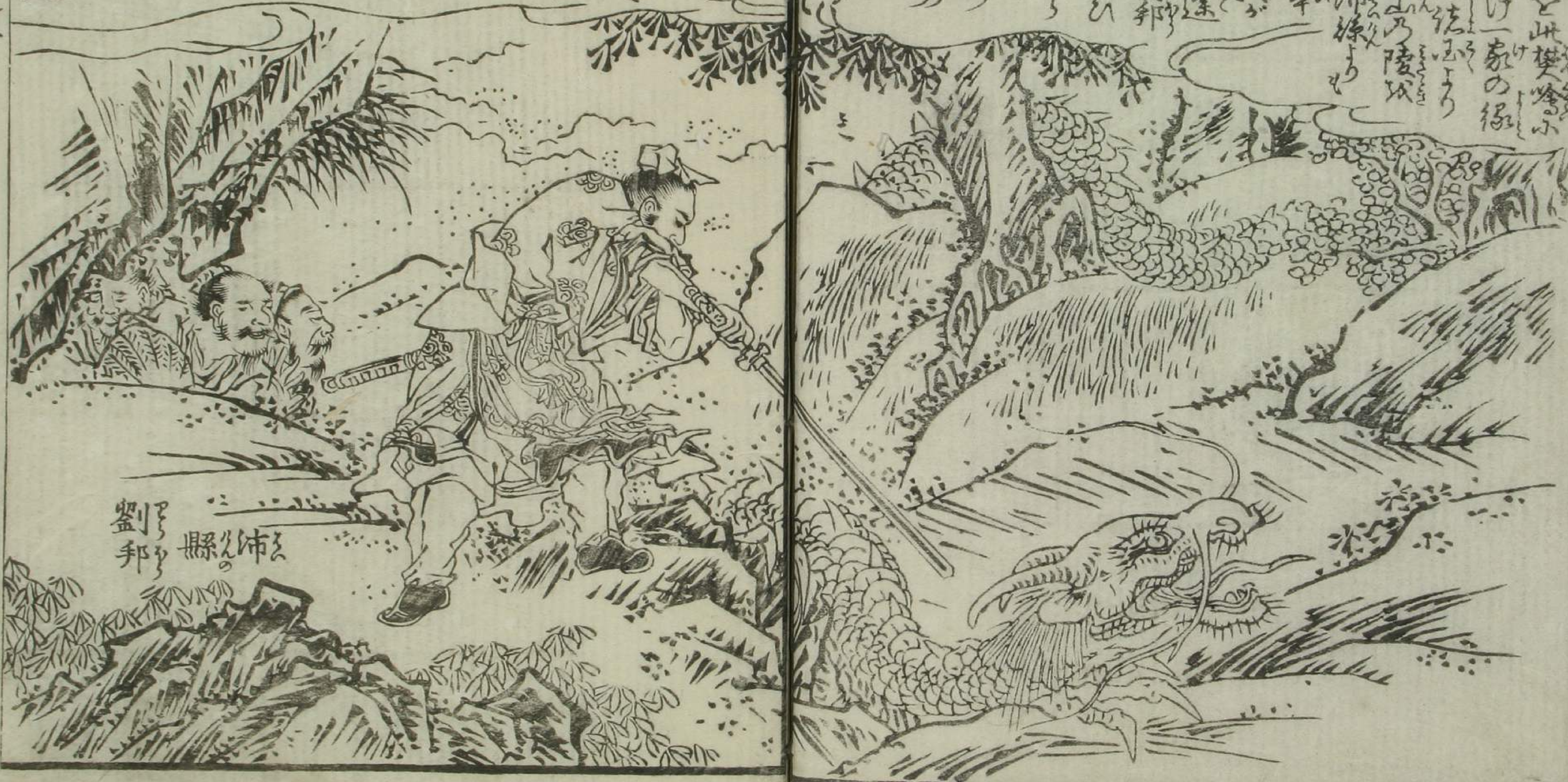
咸陽令閻楽
秦大将蒙恬
太子扶蘇

とりに扱ゐして死をたまわり李斯趙高今ハちでからに命して咸陽へうえの始皇の嫡孫ひらもし年十二なれ但子胡亥とかしつて位にたけ是を二世の皇帝となりてにおいて李斯趙高政をとりて民を志いてけ思ふまゝにめるまひくれバ天下れ民ことぐく恨く秦の世既に乱れて盗賊蜂のごとく起り騒動止られなく楚人陳渉呉廣ふたりの金鼓をおこして勢すでに数万におよびけれバ沛縣の豊邑に劉邦字ハ季といふ人ありその母大澤の堤にまどろみて神と会合するとゆめみて此劉邦をうめり長て隆準龍顔にして左の股に七十二の黒子あり度く人を愛して聡明叡智万人にすぐれつねに酒色をこのみて小吏に拘はで落魄にておむなく泗上の亭の長となれ単父の呂文といふもの劉邦のひとゞ常ならざるを見て女呂顔を劉邦が妻となし後に呂后とやせしハこれなり又劉邦の友に一人の勇士あり沛縣の人にして樊噲といふ身ハ卑しくして狗を屠りて世わたりとなす其名高ふして力よのつねの人にすぐれたり

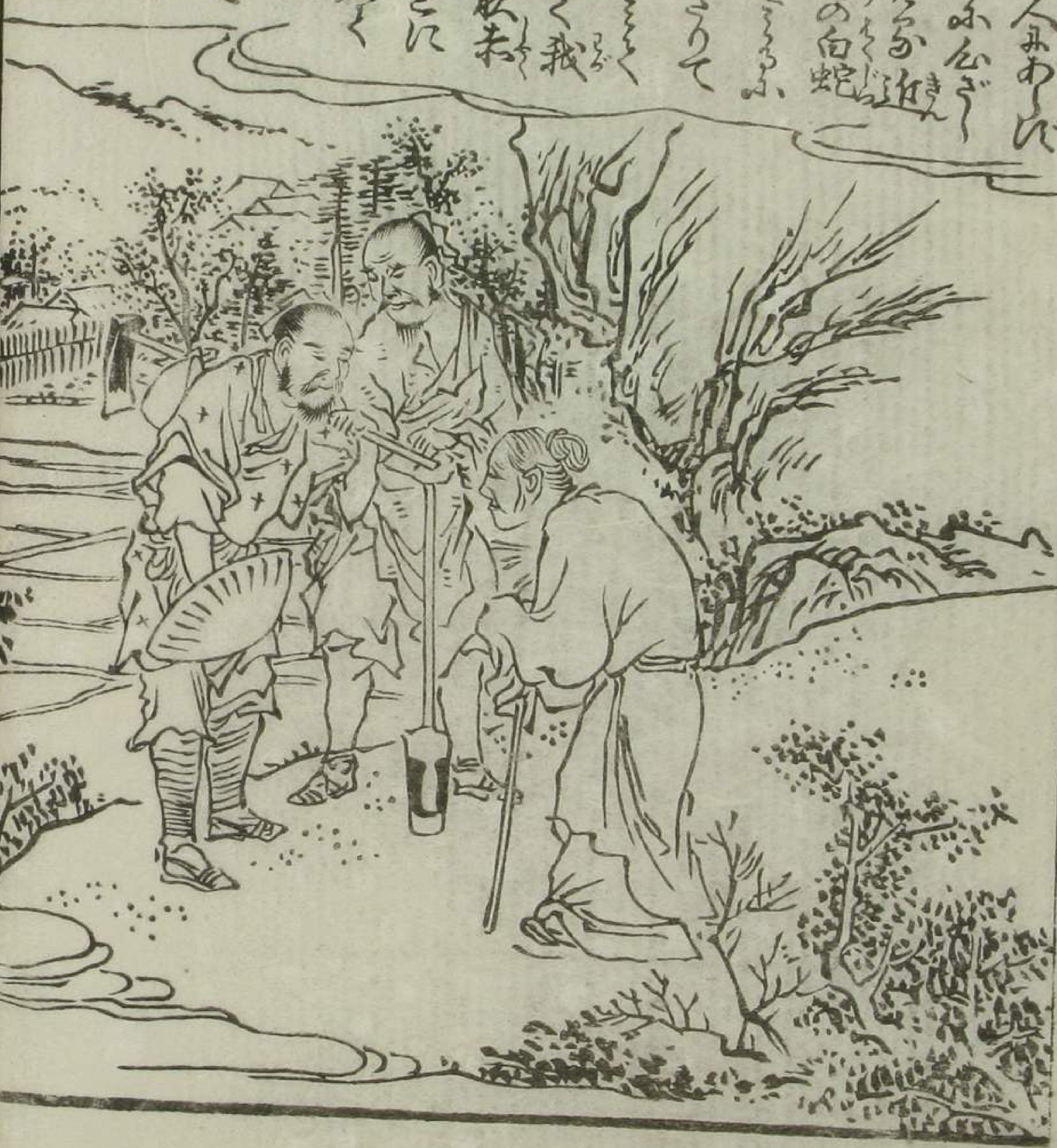

呂顔
單父呂文
沛縣の劉邦
沛縣の樊噲
呂須

呂文が二のむすめ呂須を此樊噲にめあはせ大いに酒宴をまうけ一家の縁をむすびけり○そのころ諸国より多くの人夫をよせて驪山の陵墓つくらせられ是によりて沛縣よりも人夫とあつめ劉邦を宰領として咸陽へのぼせられが人夫ら秦の悪政をうらみて途中より逃さるもの多く劉邦かくては驪山へゆくともかなひがたし其身罪科あら まぬかれがたしとおそれのこりてのこりし人夫にいとまをとらせ郷里よりかへらせしが身をよせ独人のものおゝくゆるにしたがふ十余人の人夫ハ

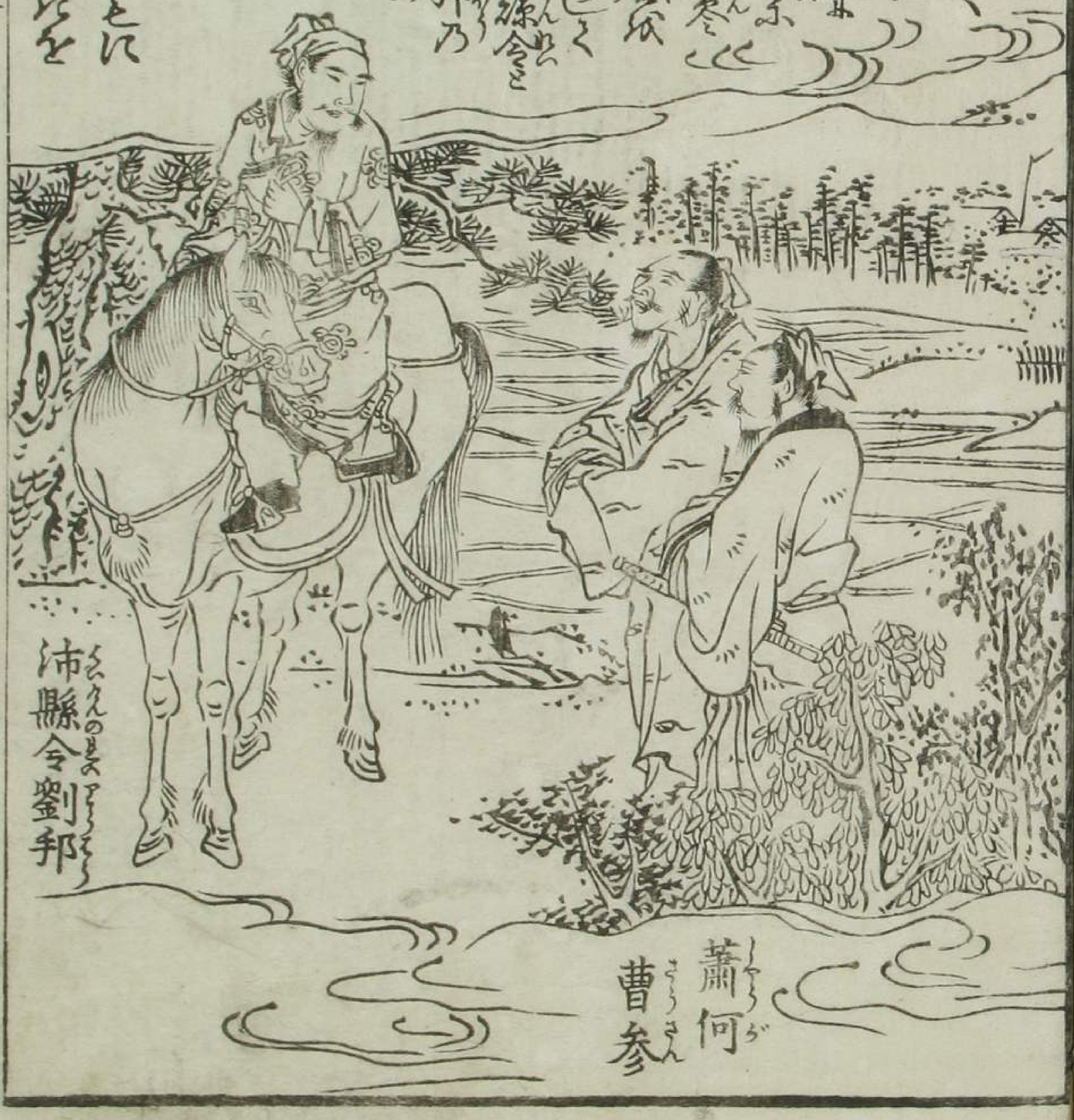
劉邦とすてがたく志のものどその夜劉邦にしたがひて芒碭山の小道を過ぎけるが先へ進みたる人夫あわててはしりかへりくやう路をさへぎる行ありて其長さ十丈ばかりの大蛇出ぞくぞく横たはりて過ぐべきようなしと告ぐ劉邦これを聞て壮士なんぞおそるべきとおそれたるけしきもなく剣をぬきて此大蛇を切て両段となしたちまち剣をおさめけりなほ行道に人夫どもは此ことを見て大きにおどろきける劉邦はいたく酔ひて程の用ゆるがくしと道に臥し此



ふしぎ成ことにこそと人みなあやしび
といつて是(これ)よりむかふ心ざし
をよせけるもの多かりけるが近(きん)
辺(へん)乃百姓(ひやくしやう)ども劉邦(りうはう)の白蛇(はくじや)
をきりたる所へゆきてみるに
年老(としおい)たる嫗(うば)毎夜(まいや)きたりて
歎(なげ)きけれバこゝかしこの者ことく
そのゆゑをとふに嫗(うば)答(こたへ)て我(わが)
子ハ白帝(はくてい)の子なりしが先夜(せんや)赤(しやく)
帝(てい)の子に切殺(きら)されうせたりとて
よりてなげくなりとんかく
かきけすごとくうせにし
ハ是これ漢(かん)炎徳(えんとく)にて
赤(あか)きゆゑならしと楚(そ)ハ
元(もと)より白(しろ)きをたうとむ漢(かん)
の楚(そ)に勝(かち)て天下(てんか)を一統(とう)

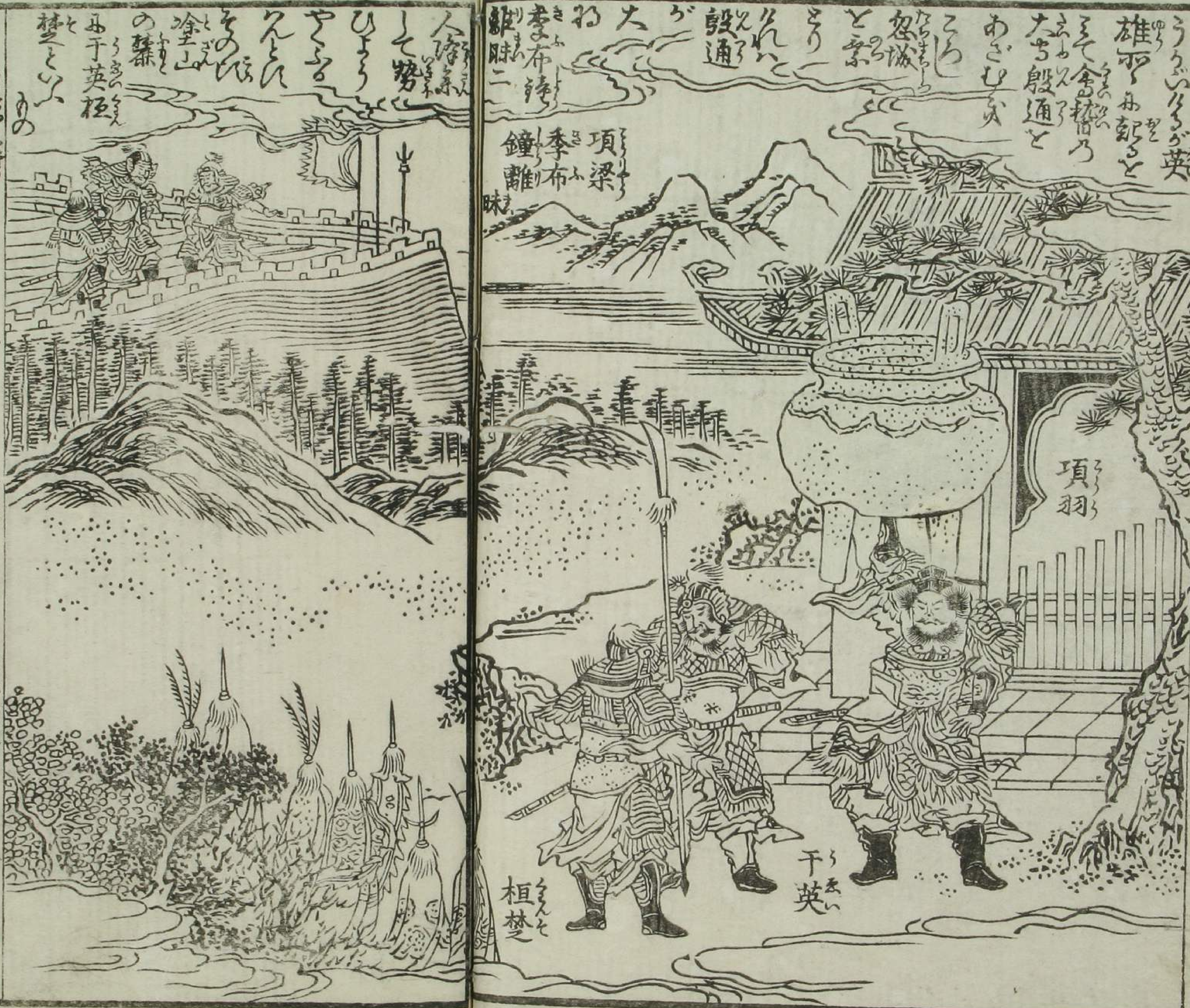


しるべき瑞表(ずいひやう)なり
されバ劉邦(りうはう)白蛇(はくじや)を切(きら)し
いきほひようやく震(ふる)ひ
相したふに軍兵(ぐんびやう)数(す)百人に
およびけれバ沛(はい)の縣令(けんれい)も
志をよする蕭何(じやうが)曹参(さうさん)と
いふもの秦(しん)乃悪虐(あくぎやく)を
にくミ終(つゐ)に縣令(けんれい)をころし
劉邦(りうはう)をむかへて沛(はい)の縣令(けんれい)と
せしかバ城中(じやうちう)の百姓(ひやくせい)劉邦(りうはう)乃
徳(とく)をしたひのこらず降(かう)
参(さん)して沛(はい)の子弟(してい)をよせ
あつまる其(その)勢(せい)二千
余人(よにん)におよびけり
○項羽(かうう)ハ叔父(をぢ)項梁(かうりやう)とゝもに
会稽(くわいけい)にかくれてゐしを



沛縣令劉邦(はいけんのれいりうはう)

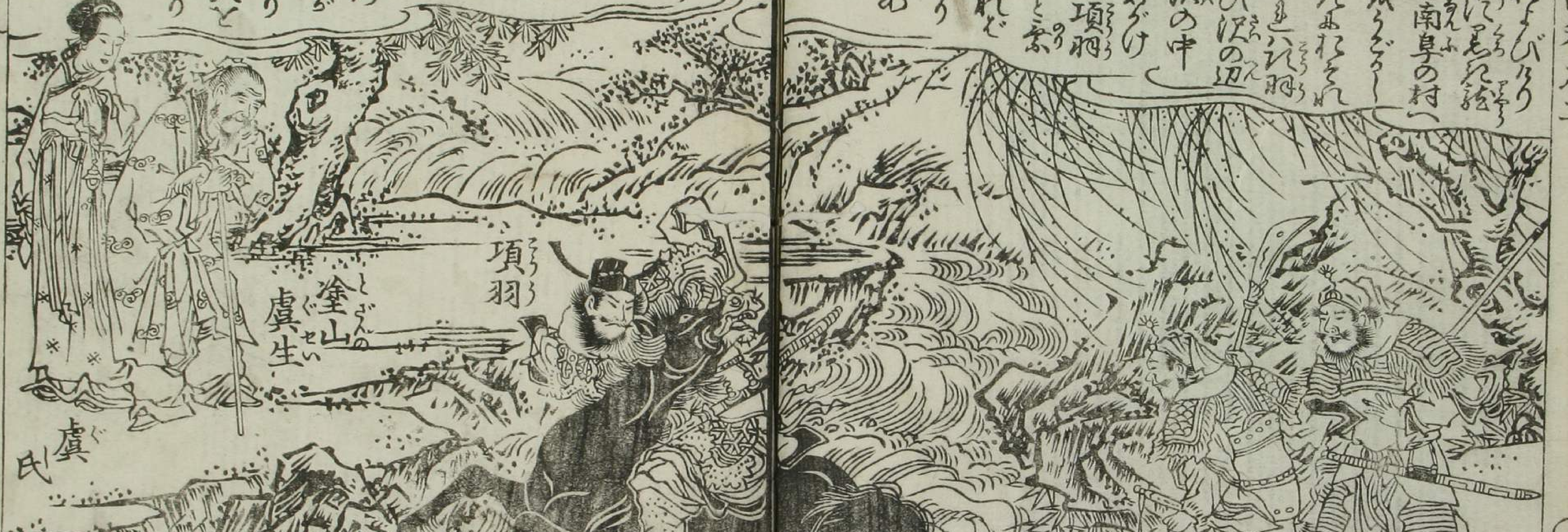
蕭何(しやうが)
曹参(さうさん)



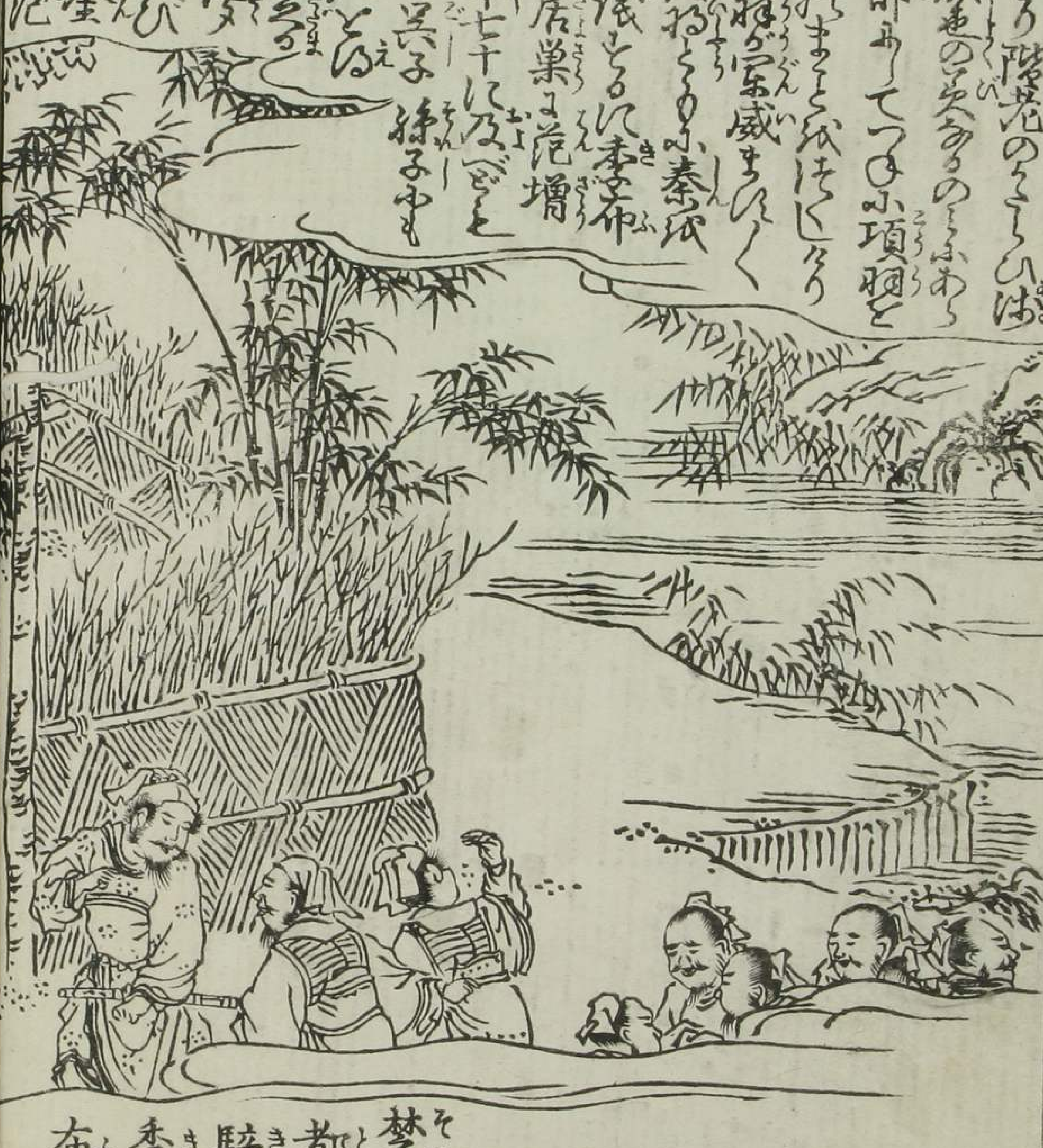
うらぶいりくるが英雄なるを聞るとみて会稽乃太守殷通とあざむかれころし忽然と争ふよりそれにて殷通が大ね季布鍾離昧二人陰系して勢ひやうやくさかんなればその頃塗山の麓に于英桓楚といふもの

八千の士卒と倶し山中にかくれ居たりけるを味方にせむとて于英桓楚あまねくさがしけるに項羽はゆふアれとこゝろし力千人にすぐれしかバ味方せんといふ村に山の如くなる禹王の廟ありそのまへに大きなる石の鼎ありおもさ幾千斤といふことをしらず項羽その鼎をかるがると左の手にさゝげて堂を三べんまはり元の所へなをしければ衆の色を変ぞざりしかバ于英桓楚大におどろき地に拝伏して君ハまことに神人なりと云ふべく遂に八千乃勢を引て味方になせらるをなりそのゝち六安の英布といふ猛将数多の軍勢を引来りて併合なる由を項梁項羽がぐんぜん

たちまち数万にならびたり
○さても塗山の沢中にて黒気結
化して馬となり毎日南阜の村へ
きたりて暴るゝ事忽地ならざりし
田畠をあらし百姓大ゐにおそれ
をのゝきしがよしきゝて今是ハ項羽
于英桓楚とゝもに彼沢の辺
に行てうかゞふに馬沢の中
よりおどり出項羽をめがけ
吼いかりて走来るを項羽
鬣をつかんで引よせ乗
十ゐ余り乗めぐりたれど
さすがの龍馬なる全身より
汗となりておとなしくなる
ゆへ今ハ于英
桓楚ともに百姓
どもあやしく感じて
たゞちに鳴も止まり
なりけれバ此馬の全
身黒毛なるもよろし
けれバ烏騅と名付
項羽毎度軍中にて
乗られしや此ハ塗山
の虞生といふもの項
羽が英雄をきゝて一人の
むすめありしを項羽が
妻とせんことを願ひたり
項羽虞生が女虞氏を
見るに年のころ二八ばかり
みて甚めでたく
美人なりしかバ大きに
よろこび遂に妻とす

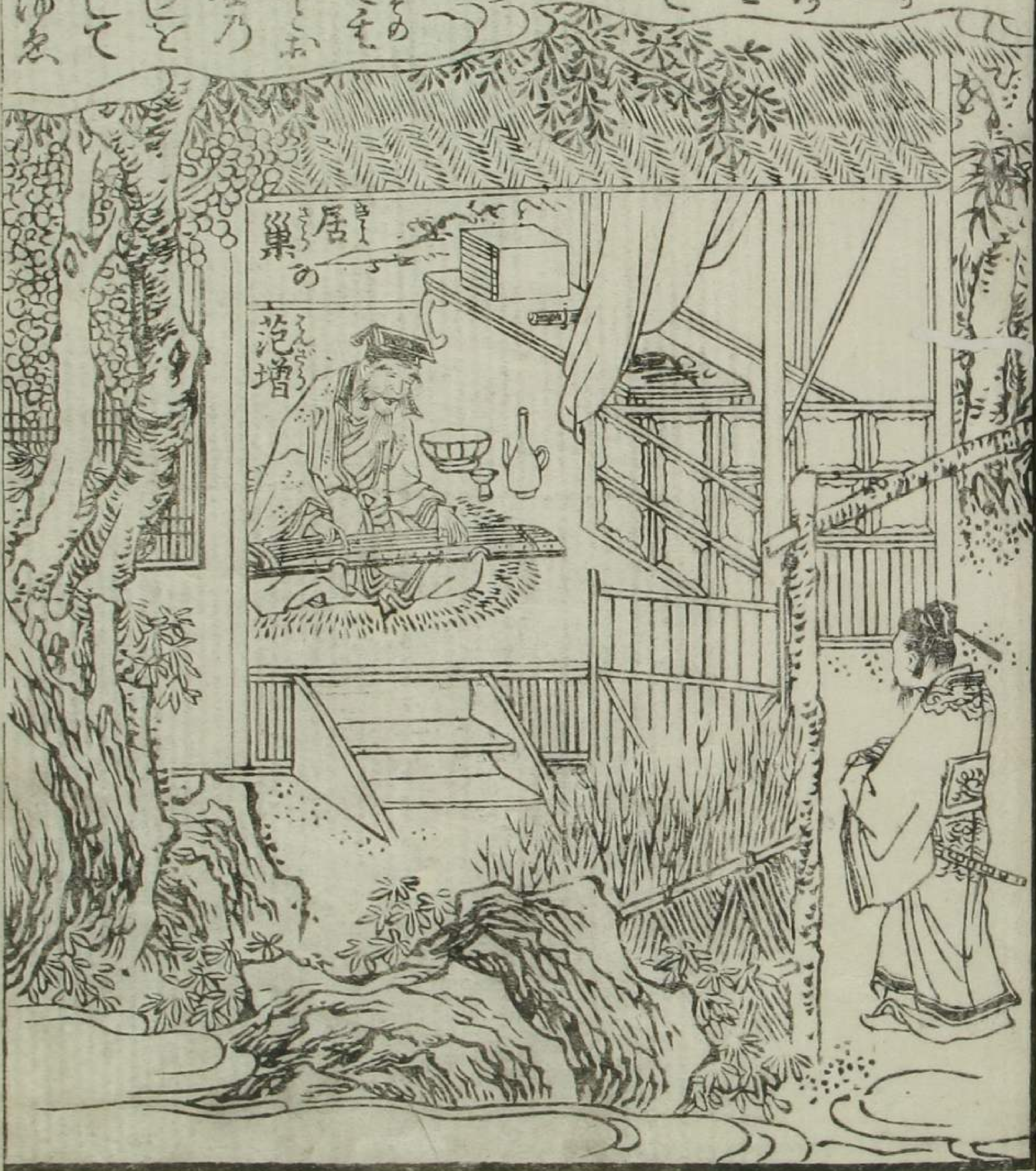


これこそ是より會稽のほとりに住
かれし虞氏ハ容色のうつくしきのみなら
ず又聡明貞節にしてつねに項羽を
いさめよく女子のまもるべきみちをしく
○されバ項梁項羽が軍威ますます
さかんにして諸侯ねがひのかに秦を
討のはかりごとを議せるに李布
なりしハ淮陰の居巣に范増
といふものあり年七十に及べども
智謀いかなる人も呉子孫子にも
おとらざりし仙人とゐるえ
ねがひ天下のしくさまかたるに
て項梁范増を召
くだされてかへるよろこび
李布ハ多くの金帛
帛をもたせて范



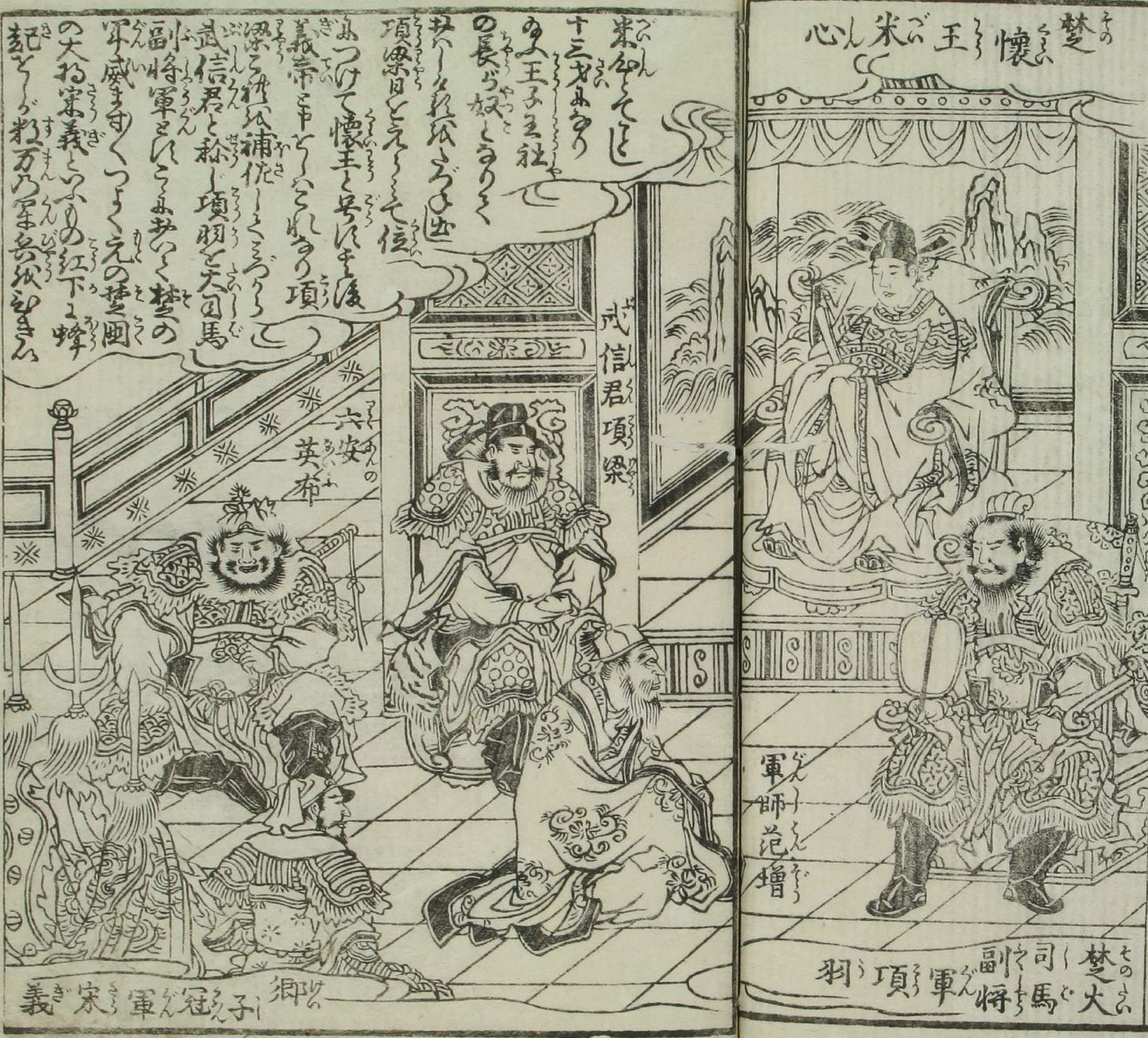
楚の都騎李布

増をむかへしむ
李布居巣にいたりて范増に
いたりてみるに幽
なる庵の内に琴を弾
乃音をきこえけれバ
李布すゝみいりて
かの金帛をさゝげ
出し項梁の命をつたへ
のべけれバ范増も
うちに楚の
天運をかりてその
のち晋をもさんとお
かれいまだ項羽の有無の
ありさまを知らざりしと
李布を頓にしたがひして
さるぐすまなりゆゑ

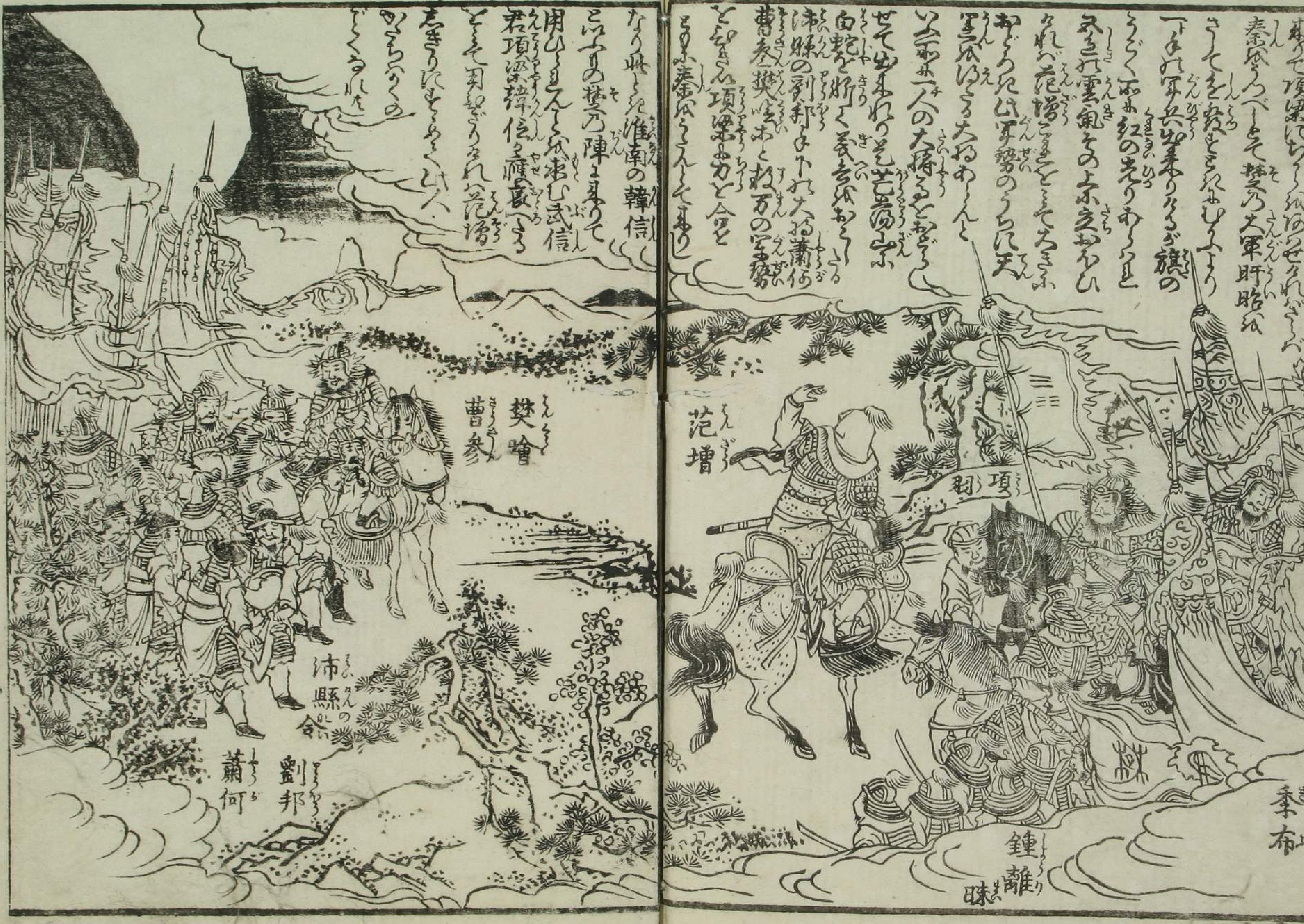


范増辞さるといへども遂に乱軍とあらそひその後天文をうかゞふに楚ハ凌この天運とはなる君にあらざりしかバ大に疑を援縛せしが大丈夫の士何ぞ天下にあらずして一言の須臾たらんやと忽ちおもひかへし次の日季布と打つれ項梁が陣に来りて見へつゝ軍機をめぐらしけり○さる程に全く教して兵をおこしける陳渉呉広の両人ハ秦の大将章邯がためにうち殺されしが陳渉が大将張耳陳餘といふ者趙王歇をたすけて趙をおこし楚に一味せり是に范増申けるハ天下を定んとする者ハ無名の兵をおこして利を得ることあらじ将軍ハ世々楚の大将なれバこそ多く楚王の子孫をたづね出し是をかしづきて君とし古主のあだを報ぜんと秦を討バ義ありて名正しくことすみやかに進べしと進れバ項梁げにもと同心し様離勝にいひて普く楚の子孫をたづね求めさせ終に楚の懐王の孫を得て

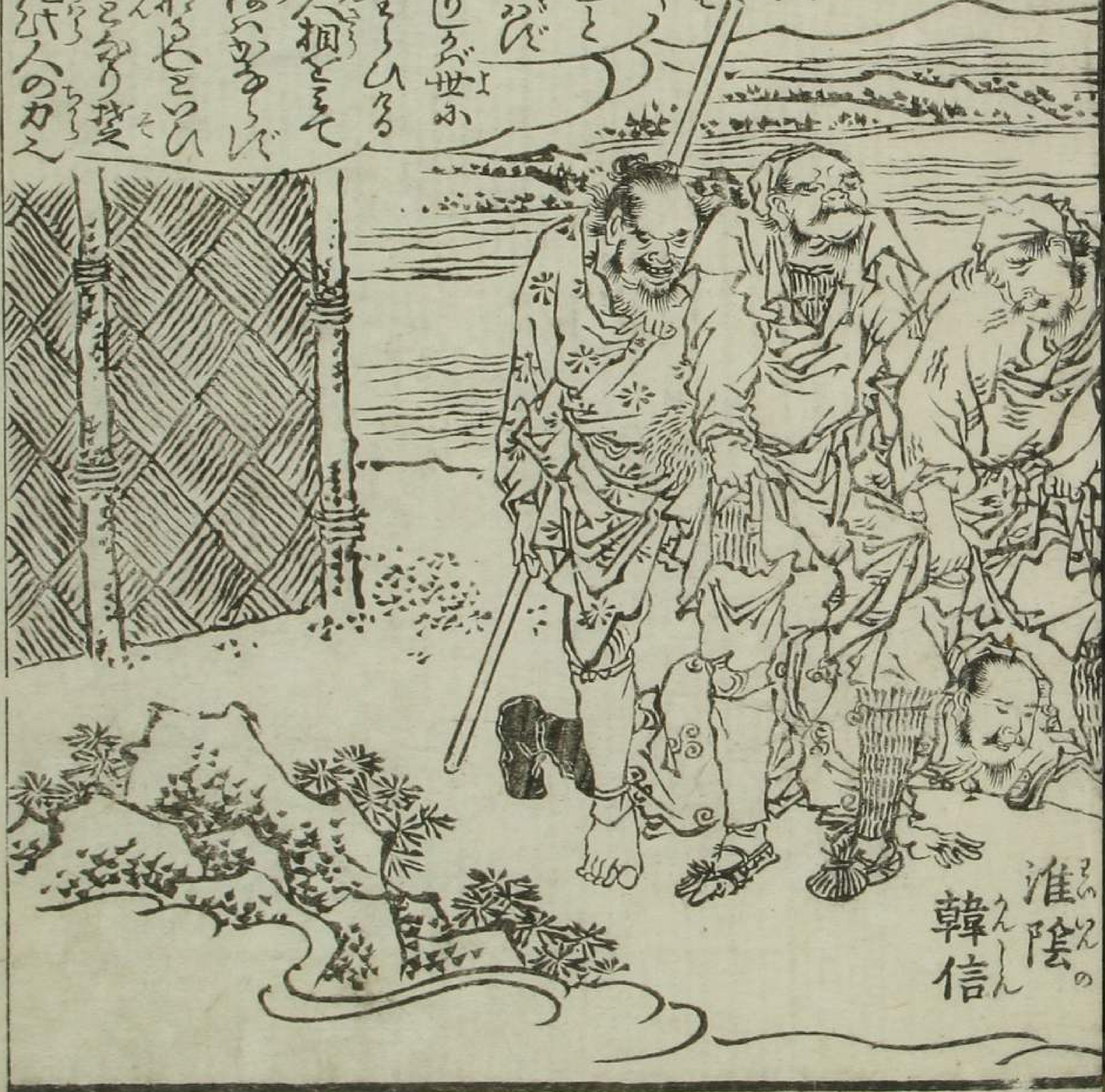
米心とて（よし）十三才になり王子王孫の長ら奴となりて牧ひしを尋ね出し項梁是を迎へて位につけて懐王と号しまた後義帝と申せしハこれなり項梁ハ新に補佐しまゐらせて武信君と称し項羽を大司馬副将軍とし万事おほく楚の軍威ますますつよく元の楚国の大将宋義といふもの江下に蜂起せしが数万の軍兵を従へきたる

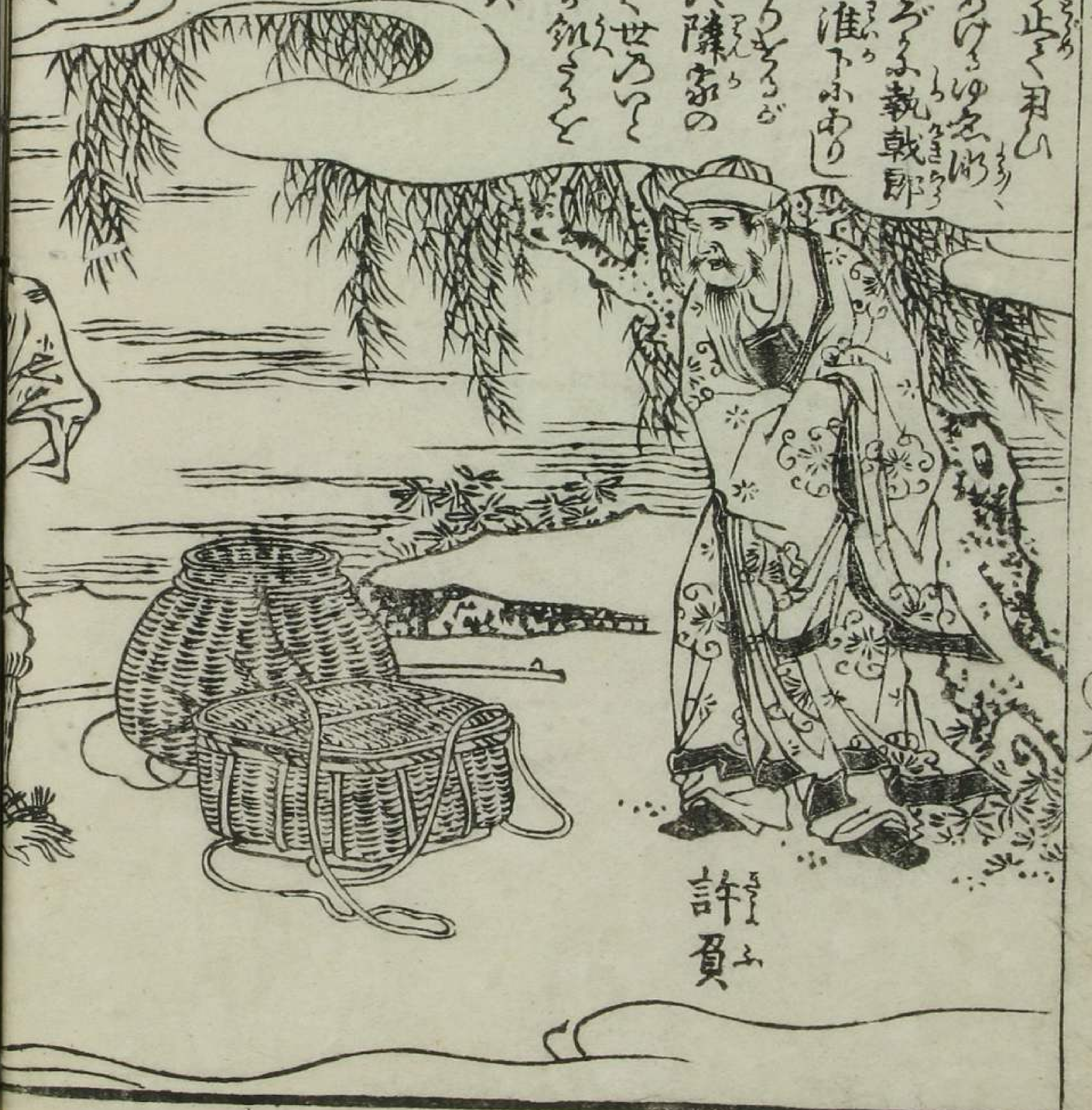

其の楚懐王米心
武信君項梁
六安英布
軍師范増
其の楚大司馬副将軍項羽
卿子冠軍宋義

去りて項梁にちかつかれのせられバさるべ
秦ハうつべしとぞ楚乃大軍昕昭ハ
さしてを發とさ給ふむしよより
一ト手れ軍兵出来りけるが旗の
うごく所ニ紅の光りありけるを
見られ雲氣その上ニ立おほひ
見れバ范増これをとりて大きニ
おどろき此軍勢のうちに天
子の氣ある大将あらんと
いぶかしく一人の大将をよびよ
せて出来れり是芒碭山に
白蛇を斬て義兵をおこしける
沛縣の劉邦とて下れバ大ね蕭何
曹参樊噲おし數万の軍勢
ともなひ項梁ニ力を合せ
共ニ秦をうたんとて来りし
なり此ときに淮南の韓信
といふもの楚乃陣に来りて
用ひられん事を求む武信
君項梁韓信を疎る
とぞ用ひざりけれバ范増
是をいとをしく思ひけれバ
かさねて〳〵の
ごとくなりし



智謀ハ万人にすぐれ忠く君に仕へしかバほどなくしてありけるゆゑ韓信を陣中にとゞめおきわづかに執戟郎官に封じたり彼韓信淮下にありしとき魚をつりて世をわたりけるが飢渇ありて一日食せず漂家の嫖母とて絮をあらふ女ありてふかくあはれみて女あり韓信が飢をたすくるをあまたゝび一飯をあたへけれバ韓信そのこゝろざしを感じわれのちに富貴の身とならバ厚く此恩をむくゆべしといひけれバ嫖母怒て大丈夫の士みづから一飯の食をもとむることあらんやゑのくまに食をあたへられ何ぞむくいを求んやとやりける又ある日韓信つりする魚を売んと市に出ければ腕ぶてある若ものが韓信をあなどり汝ハいつも腰に釼をよこたへたるが汝男ならバ其釼をぬきてわれを切れかし切ることならずバわが股をくゞれといへバ韓信一言の問答にも及バで身を起してその股をくゞりしが世を往来者ありしに是を見てわらひけるに許負といふもの韓信が人相をみて此人今かく恥しめをうけたれ後ハかならず王侯となり富貴をきはめんといひしかうして後漢の大将軍となり楚を亡し漢の天下を定しハ偏に一人の力也





文政十二己丑春 鶴屋喜右衛門板

御免江戸暦開板所 毎年十一月下旬より売初申候 [illegible]

載陽帖 全一冊 南山禅師書 四体和文章

新撰日本名所之繪 唐紙摺一枚 蕙齋鍬形紹眞筆 [illegible]

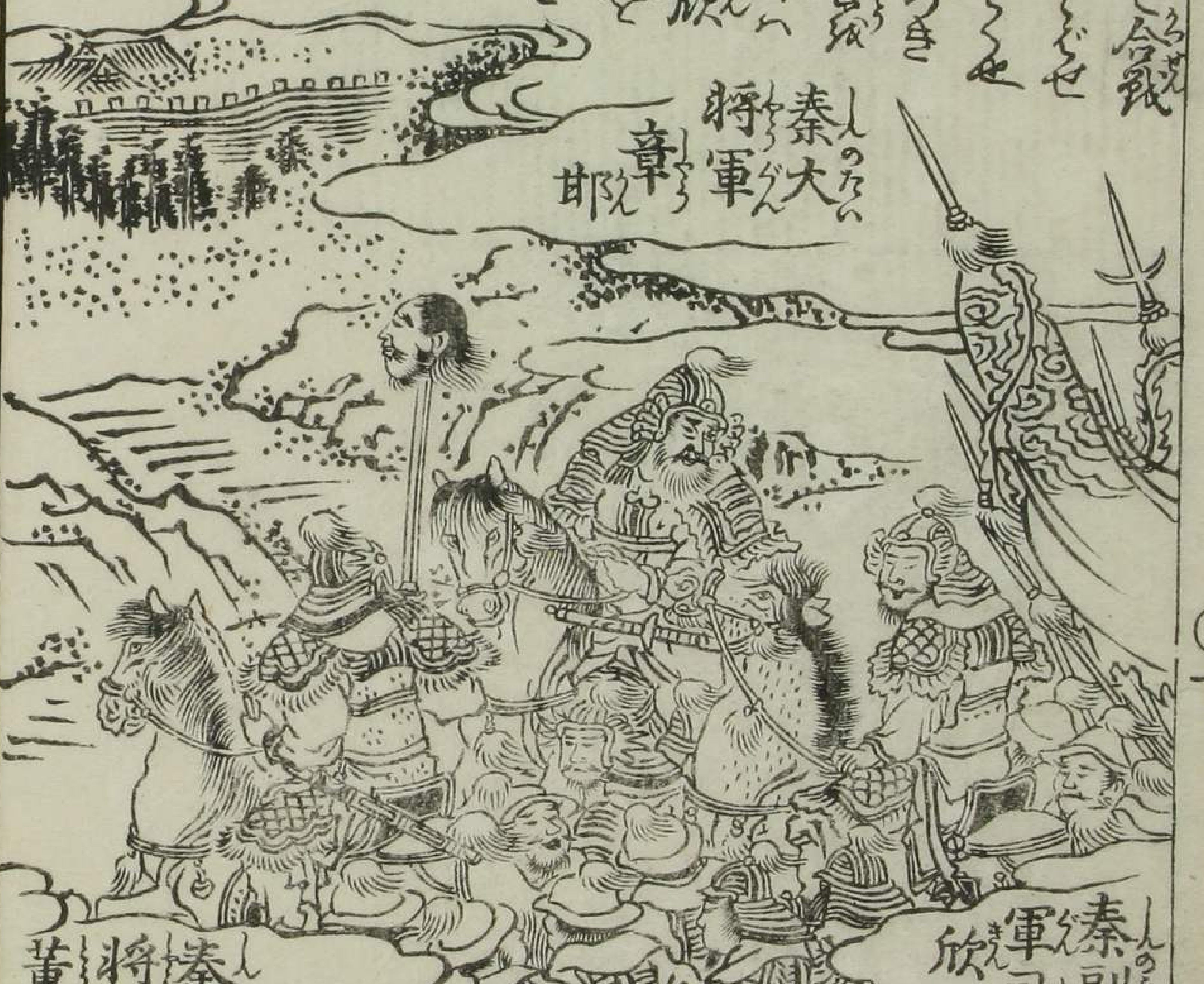
新撰女古状揃園生竹 大本 半紙本 両品出来 高井蘭山編撰 [illegible]

還魂紙料 柳亭種彦随筆 古画入 二冊 [illegible]

田舎庵輯 若のむらさき [illegible]

随筆 玄同放言 初編 二編 共二冊 [illegible]

されバ諸国の英雄一時に起りて合戦やむことなく咸陽へ早打をよせ注進をいたす事櫛の歯を引がごとくなれバ丞相趙高ハ大きにおどろき大将軍章邯に五十万の軍兵をさづけて楚をうたしむ章邯ハ秦の名将にして副将司馬欣董翳李由をともなひ咸陽を発しまづすゝんで斉をうち武信君項梁斉をすくはんとしてかへつて章邯がはかりことにおちいり項梁乱軍のうちに討死しかバ楚の軍兵大きにちからをおとし項羽が勢大かたならずときこえし


秦大将軍章邯
秦副将軍司馬欣
秦副将軍董翳

三都狂歌本校讎 芳艸集 全一冊 開板

[illegible]

同校解 楳取蘭集 全二冊 追刻

[illegible]

歡童戯筆 遊言画手本 一名 鳥羽繪早まなび 出来

[illegible]

廣益魁記 懐中早割大全 小本 全一冊

[illegible]

新形染絵目 捨花手引草 前編出来 後編彫刻

[illegible]

芝居似顔早稽古 後編 全一冊 五渡亭國貞画

[illegible]

八文舎自笑評 三箇の津 役者評判記 三冊 全

當丑三月[illegible] [redacted]

[illegible]

即考百識 全一冊

[illegible]

偐紫田舎源氏 全八冊 柳亭種彦作 歌川國貞画

式亭虎之助作 喜怒哀楽堪忍袋 全六冊 歌川国安画

油屋お染 おそめ久松 新形染松葉重 全二冊 [illegible]作 歌川秀[illegible]画

鎌倉山百人一首 全三冊 戀川春町作 歌川秀[illegible]画

立春大吉 廓薫名寄生梅川 全五冊 古今亭三鳥作 歌川貞幸画

天竺の方便妄語 唐土の偶言譚 日本の伴僧不思議 三國妖狐殺生石 全五冊 五柳亭徳升作 歌川國安画

美艶仙女香 四十八銅 坂本氏製

黒油美玄香 四十八銅 [illegible]

蘭傳 靈應丹 本家肥前平戸山本氏精製 弘所 室町二丁目 河内屋長兵衛 取次 通油町 鶴屋喜右エ門 [illegible]

役者夏の富士 京山作 國貞画 絵入 画本 全一冊

東海道五十三次 花の都路 諸大人 狂哥入 同断 全一冊

隅田川両岸一覧 北斎筆 同断 全三冊

江戸名所東鑑 慧斎筆 同断 全三冊

江戸名所物見仕 清長筆 同断 全三冊

右五冊共 [illegible]

江戸名物 錦絵 團扇 地紙問屋
通油町 鶴屋喜右衛門版

司